

Z32-B88

修監 馬生島分 村藤崎島

# 金の船

号月五



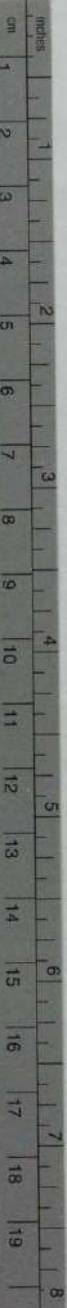
号五第

卷一

国立

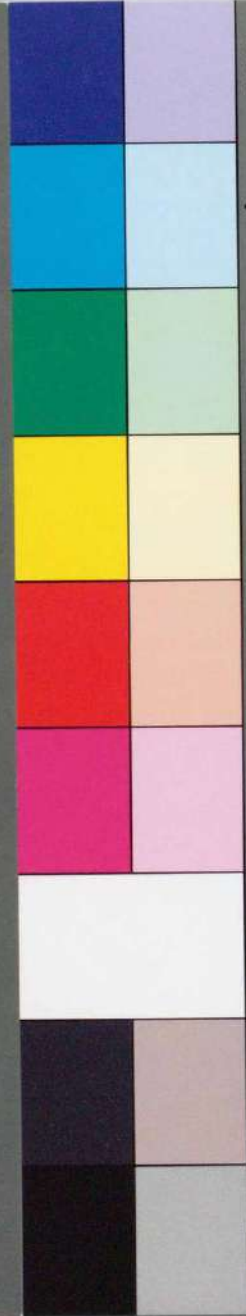
8.3

区



## Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



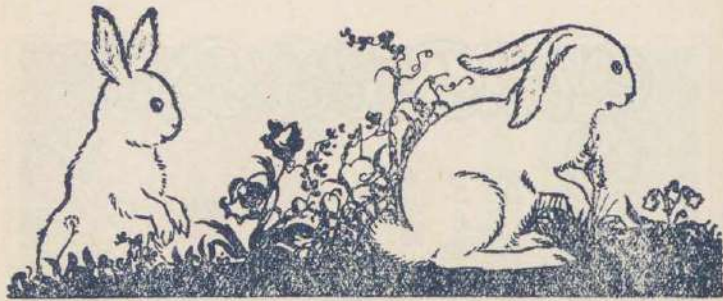
## Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





「金の船」五月號 第二卷第五號

はちみつ(表紙、石版刷)	岡本歸一
淳さんの夢(口繪、三色版)	本居長世
人買船(曲體)	野口雨情
お背戸の敷(童話)	有島生馬
ルルの話(童話)	長田秀雄
蟻のお國(長篇童話)	四條八十
不思議な窓(童話)	茅野雅子
しやぼん玉(童話)	沖野岩三郎
山六爺さん(童話)	灰野庄平
落ちた雀の話(童話)	小山内薫
琴の太郎(長篇童話)	鈴木善太郎
大系小糸(童話)	

よしきりの唄(童話)	若山喜志子
鶯の家鴨(推談)	齋藤素果
木曾義仲の最期(歴史童話)	窪田空穂
蟻地獄(推談)	坂田露香
ガンガン王(童話)	横山壽篤
王子と燕(童話)	齋藤佐次郎
雨夜の傘(童話)	野口雨情
白い兎(幼紅詩)	若山牧水選
アサノコト(綴方)	
ヨルノ景色(自由畫)	山本鼎選
自由畫の版に就て	山本鼎
挿畫	岡本歸一
三色版及製版	田中松太郎



淳さんの夢

淳さんの馬車は、何時の間にかお城の前に出ました。龍宮城のやうな門があつて、その上に大槐安國といふ金の額が光つてゐました。その内に門がざいつと開いて、馬車はゴロゴロと汲込まれる様にお城の内に入つて行きましたが東華館といふ御殿の前で止りました。

「さあ遠方のところ御疲れで御座いましたらう。」と、云つて使者が淳さんを馬車から降しました。(蝶のお國「第十五頁」)

3 4 3 6 | 4 2 3 - |  
ひ よ かり は ぶ ね け

4 6 7 6 | 4 2 3 - 7. 7 6 7 |  
か は れ て 行 つ た り び ん ぼ さん  
み な ミ は な き た ら み な さ ん

1 2 3 3 | 7. 7 1 3 | 1 7 6 - ||  
ま ら の ー び な ぼ な び な び な び なた



人買船

作曲 本居長世  
作詞 野口雨情

人買船に  
買はれて  
行つた  
貧棒な  
村の  
山ほととぎす  
日和は精け  
港は  
風ぎろ  
皆さんさよな  
泣きく  
言ふた



お脊戸の藪(子守唄)

野口雨情

お脊戸のお脊戸の

赤蜻蛉

狐のお囁

致しませう

糸機七年

織りました



信田の狐は

親狐

お脊戸のお脊戸の

赤蜻蛉

明日もお藪に

来てとまれ



ルルの話

有島生馬

四

次に正夫さんのお家に犬の子を貰ひたいと云つて来たのは、二十歳許りの書生さんでした。でもその書生さんが犬の子が欲しいのではなくて、書生さんは御主人の咄付で、唯使にやつて来たのでした。

恰度正夫さんが家にゐたので、裏の方へ書生さんを案内して行きました。赤斑のカリイノは

正夫さんのものですし、黒は秀太さんが貰つて行きまし、黒の斑と茶の斑とは先に死んでしまひましたし、後に残つてゐるのは跛の瘦せた白と、小さな癖に意地の悪い狸と、もう一匹の黒斑と三つ限りでした。この三匹の中では、誰が見ても肥つて色艶のいい黒斑が第一の犬でした。書生さんもすぐその黒斑を頂いて行きたいと云ひました。さうして用意して来た籠にそれを入れ、軽々と小脇にかゝへ、正夫さんにお禮を云つて歸つて行きました。正夫さんは門の處まで黒斑を送つて行つて、別れ



ました。



二

黒斑の貰はれて行つたのはどんなお家でしたらう。それは正夫さんの處から、五六町しか離れてゐない或る大きなお屋敷で、お庭なんかは正夫さんの處の十倍ほどの廣さがあり、大きなお池には、芝の生えた島もあり、船も浮んでゐました。黒斑は立派な頸環をして貰ひ、ルルといふ名をつけられ、お夏さんといふ十五になるお姉さん、春雄さんといふ十二になる坊ちゃんお冬さんといふ七つになるお嬢さん達から、毎日、ルル、ルルと可愛がられ、おいしいものを

五

るのが辛いやうな心持でその顔を見ました。黒斑も正夫さんと同じ心持なのでせう、頻りにくん／＼啼きながら籠の目から正夫さんの方を見ました。町の角を曲るまで正夫さんは御門に立つて見てゐました。書生さんの姿が見えなくなつた時、黒斑の貰はれて行つた先はどんなお家かしらと、正夫さんは考へて見ました。どんな人達がゐるんだらう、どんなお庭があるんだらう、どんな名が付けられるんだらう、そんな事まで考へると、急に後から付いて行つてみたいやうな心持がし





六  
澤山たべさせて貰ひました。春雄さんは秀太さんのお友達でしたから、秀太さんが犬を貰つた事を聞いて、自分も欲しくなり、お父様に願つて、書生に貰ひに行つてもらつたのでした。

黒斑のルルは可愛がられ、おいしいものを澤山たべ、益々色艶のいい、肥つた丈夫な立派な犬になりましたが、いろんないたづらや悪さをも覚えました。第一に踏石の上にあつたお庭下駄を玩具にして、片端から鼻緒を噛切り、齒のあとだらけにして終ひました。それからお庭の本戸の下に穴を掘つて、臺所の方へ行かれる道を造りました。それから縁側に上り、お座敷の障子に穴を明け、そこから可愛い顔を出して、春雄さんやお冬さんに「今日は、ばああ」をいせました。それから人間の油断してゐる處を見付けては、色々ないたづらを次から次へ考へ出してやつてみました。然しルル自身は、決して悪い積りでそんな事をするのではないのに、なぜ人間は怒つたり、ぶつたりするのか、それが反つて譯が分りませんでした。だから人間がルルを叱りに來たり、ぶちに來たりすると、反つて喜んで無様に飛び付いたり、ぢやれ付いたりして尙叱られました。

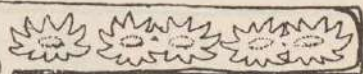
ルルが大きなお庭車を一人で占領し、威張つて馳けずり廻つてゐたのも、長い事ではありませんでした。

ある日例の書生さんが鎖を持って來て、ルルの頸環につけ、裏の臺所の方へ引張つて行つて、夫小屋にしつかり結びつけて終ひましたから、そこから一日中動く事は出来なくなりました。ルルはもう楽しいお庭に遊びに行く事も、お嬢さんや坊ちゃん達と馳け廻る事も出来なくなつてしまつたのを悲みました。夫小屋で一日を暮すのは、退屈で退屈でたまりません。吠えて見たり、欠伸をしてみたり、立つてみたり、ねてみたりしましたが、ちつとも面白い事はありません。食欲も段々になくなりました。いくら御馳走があつても、半分喰べるとあとはもう嫌になつて終ひました。それに一日一日蚤も増えて來て、一層小屋にゐるのが辛くなり、立派な頸環が一番恨めしく思はれました。

三



七  
とうとう或る春の麗な日、ルルは鎖を切つてお庭の方へ飛び出して來ました。その時の喜び方はまるで氣でも狂つた様で、池の周りを馳けてゐるかと思ふと、もう岳の上に行つてゐます。藪を潜つたり、圓く斯込んだ植木を飛び越えたりしてゐました。家の中で此様子を見た春雄さんは、



「やあ、ルルが逃げ出して来た。」  
と、云ひながら靴足袋のまんまで、庭へ駆けだしました。それを見ると、お冬さんも兄さんのあとから、大きな庭下駄をひきずってついて行きました。二人がお池にか、つてゐる土橋の上まで行くと、ルルは築山の向ふからまつしぐらに飛んで来ました。裏の大小屋にやられてから、春雄さん達はめつたに見舞つてもやりませんでした。裏の大小屋にやられてかへたのが、どんなに嬉しかつたか分りません。中島を通り抜け、橋の方へ馬が跳る時のやうな足どりで、二人の方へ近寄つて来ました。

お夏さんはこの時縁側に立つて、ルルの勇ましい様子を遠方から見てもました。

「お母様一寸こへ来てご覧なさい、ルルが鎖を切つて来て、それは喜んでお庭中駆け廻つてゐますから。」

「おや〜ルルが逃げて来たの、仕方ない犬だね。又お父様がどんなに小言をおつしやるか知れやしないよ。早く書生はさう云つてつかまへさせてお呉れ。」

障子の内外でそんな話をしてゐる間に、ルルはもう春雄さんの處に来ていきなりじやれ付きました。前脚を春雄さんの肩に載せ、舌を出して、その顔をなめようとし



「又飛び付いてよ！あゝ……。」

冬子さんが二三歩よろけて、土橋の縁りにしざつた時、もう一度ルルが飛びついたからたまりません、冬子さんはあほのけ様にざぶんとお池の中に落ちて終ひました。それが一寸の間の出来事ですから、春雄さんがいくらそばにゐてもどうする事も出来ませんでした。

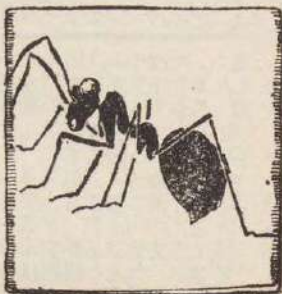
「あら大變！冬子さんがお池に落ちた……お母様！」さう云ひながら夏子さんは、縁側から飛び下りて、お池の方へ行きました。

お母様もやつとこさで奥のお部屋から出て来て、夏子さんの後からお池の方へいらつしやいました。(つづく)

ましたから、春雄さんは驚いて身をかはしますと、今度は冬子さんに飛び付きました。飛び付かれた冬子さんはもう夢中で、わつと泣き出しました。

それを縁側で見てゐたお姉さんは、気が氣ではありませんが、

「あらお母様ルルが冬子さんに飛び付いた事よ。あぶない〜、冬子さんがよた〜してゐる。今冬子さんの顔をなめてよ。あらあぶない、肩に飛び付いた。ぶつた。ぶつたりしないで早く逃げればいゝのに。あゝあぶない



# 蟻のお國

長田 秀雄

ひかしひかし、大昔、支那の國が、大へん強く  
て開けてゐた時分の事です。淳さんと云ふ人が居  
ました。この人はなかなか偉い人でしたけれども、  
大へん御酒が好きで、そのために何時も貧乏ばか  
りしてゐました。でも、兎に角、人に勝れた所が  
ありますから、お上でも可哀さうだと思つて陸軍  
の士官に取立てられました。持つたが病で、毎  
日お酒ばかり飲んでゐるので、たうとう士官が務  
まらず、何時か免職されてしまひました。

淳さんはそれが大そう不平でした。その當時の  
をして飲んでばかりゐて、どうするつもりだらう。  
一つ何か天下のために力を盡して見たい物だ」と、  
から思つても見ますが、何しろ酔つぱらひで通つ  
てゐるだけ用ひてくれる人がありません。  
『え、くさくさしてしまふ。また一つ酒でも飲  
むかな。』と、すぐ淳さんはかう思つてしまひます。  
そして、例の友だちを集めては、こんもりとい  
い工合に枝の茂つた槐の木の下へ陣どつて飲み始  
めるのでした。

或日、生憎、友だちが一人も来ないので、淳さ  
んは淋しがりながら、槐の木の下に、どつかりと  
坐つて、お酒を飲んでゐました。丁度、初夏でし  
た。槐の枝には、目のさめるやうな若葉がそよそ  
よと風に吹かれて、動いてゐました。熱い日の光  
が、その枝の動くにつれて、乾いた地面の上に映  
した黒い影を、チラチラ動かしてゐます。淳さん

の居るところは深い日陰になつてゐま  
すから、涼しくつよい氣持です。  
見ると、蟻が大へん長い行列を這つ  
て、自分の坐つてゐる處の方へやつて



きました。

「蟻と云ふ蟲はなかなかよく働く蟲だ。ちと俺も見習ふかな。」と、何の氣もなく、かう思つて、淳さんはその蟻の行列の來るのを眺めてゐました。

あたりは大そう静かでした。

蟻の行列は、ぞろぞろと日に照された地面から、暗い日蔭に入つてきました。そして、淳さんの足をよけて、槐の木の大い根のところに行きました。

「きつと、此邊に穴があるんだらう。見届けてやれ。」と、かう思つて、淳さんは、もう酔つてチラチラする眼で、癖乎と、蟻の行衛を見つめてゐました。

蟻の行列は、大い根を乗越えて、そこにある小さな穴に入つてしまひました。

「一體、蟻のお國にも、人間のやうな言葉や文字

んは、

「を、さうです。淳です」と答へたのです。その人はまた言葉をついで、

「申遅れましたが、私は大槐安國からの使者で御座ります。私の國の皇帝陛下があなたが大へん偉いお方だと云ふお話を聞かれました是非王女殿下の嫁にしたいと云ふ思召で、私をおつかはしになつたので御座ります。どうぞ御一緒に大槐安國まで御出が願ひたら御座ります。」と、泰やしく申しました。



があるのだらうか。」と、かう淳さんは考へて見ました。

その内に、あんまり飲んだので、何時となく眠くなつてきました……

……ふと淳さんは人の呼ぶ聲で眼をさました。見ると、何時やつて來たのか、自分の前には、黒い頭巾のやうな帽子をかぶつて、奇麗な紫の衣服を着た立派な人が、五六人の供をつれて立つてゐます。日は相かはらず熱さうに輝いてゐました。

「不思議だなあ。誰だらう、この人は。」と、眼をこすりながら、居すまむを直した淳さんはいろいろ考へてみても分りません。すると、その人は、丁寧に御辭儀をして

「あなたは有名な淳さんでいらつしやいますか。」とききました。狐につまゝれたやうな氣持で淳さ

「大槐安國とは聞いた事のない國の名だが、一體、何處の事です。」と、吃驚して、淳さんは聞きまじた。すると、使者は

「それはお出になればすぐ分ります。なかなかよい處ですから、是非御出で下さいまし。」とかう云つて、後の方をさし招きました。すると、見た事もないやうな立派な馬車を持つて大勢の家來が、矢張黒い頭巾に紫の衣服を着てやつてきました。そして、そこに平伏しま

した。淳さんは何が何だかさっぱり分らない内にその馬車に乗せられてしまひました。

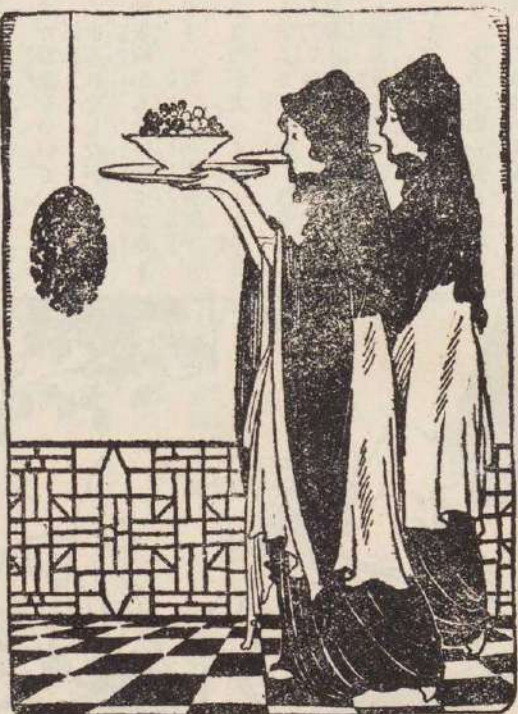
一四

大きな穴のなかに入つてしまひました。穴の内は廣く開けて、やはり、これ迄淳さんの住んでゐた支那の國のやうに、田

があつたり畑があつたり大きな山や川があつたりするのです。淳さんは

「不思議な世界に來たものだ。」と思つてゐますと、馬車は何時の間にか、立派な街の内を走つてゐました。どろどろ人が通つてゐます。

それが皆、黒い頭巾と紫の衣服を着てゐるのです。女は頭巾をかぶつては居ませんが、男より派手な紫の長い衣服をきてゐました。その内に馬車は大通りから、立派なお城の前に出ました。



馬車は何處ともなく軋つて行きました。暫らく行くと、馬車は山のやうな太い木の根を越えて、

よく皆さんが繪で御覽なさる龍宮城のやうな大きな門があつて、その上に、大槐安國と云ふ金の額がビカビカ光つてゐました。

淳さんはすつかり氣を吞まれて物を云ふ事も出来ませんでした。

門がぎいつと開くと、淳さんの馬車はゴロゴロと吸込まれるやうに、其お城の内に入つてゆきました。そして、立派な役所や御庭の間を通りぬけて東華館と云ふ額の上つた御殿の前で止りました。

「さあ、遠方の處御疲れて御座りましたらう。」と云つて、さつさの使者が淳さんを馬車から降しました。

大理石の石階を上ると、その御殿の客間らしい處です。入口には大臣の段功と云ふ人が待つてゐて、すぐ淳さんを客間の上座にすゑました。すると驚いた事には、そこに、淳さんの不斷の飲友だ

ちの周さんと云ふ人と學問の出來る田さんと云ふ人とが來てゐました。二人は國王の命で、淳さんの御相手に前から呼んであつたのです。

その内に腰元たちが、いろんな御馳走を運んで來ました。田さんと周さんとは、まるで自分の家のやうな心安さで、淳さんに盃をすゑました。初めの内は淳さんは、少し薄氣味が悪いので、用心して飲みませんでした。

何はともあれ、心を知合つた友だちが二人までも居てすゑめるので、つひ

「え、大丈夫だらう。飲んでしまへ。」と云ふ氣になつて、たうとう大へん酔つてしまひました。

すると、大臣の段さんが出てきて、「今日は御疲でせうから、このまゝゆつくり召上つて下さい。皇帝陛下は明日御會ひになるさうで御座います。」と云ひました。(つゞく)

一五

# 不思議な窓

西條八十



三

不思議な窓を手に入れてからと云ふものは、スラドンは晝間會社へ出てゐても、ぼんやり夢を見てゐるやうな氣持で暮すことが多くなりました。あの黄金の龍のついた旗が泛んでゐる、窓の中の静な國のことばかりが、始終氣になつてゐました。

「一體、あれは何處の國の旗なんだらう？」と、スラドンは考へて、いろ／＼な地理の本や辭書などを委しく調べてみました。また諸方の人

にも訊いてみました。が、何の本にも出てゐず、また知つてゐる人もありませんでした。中には、「何故そんな事を訊くんだい？」と、不審さうに尋ねる友達もありましたが、スラドンは大切な窓のことは決して一言も他人に話しませんでした。

で、いろ／＼と調べ抜いた擧句、この黄金の龍の旗が翻つてゐる國を見ることが出来るのは、自分ひとりだけだと云ふことを悟ると、スラドんに

は何となくこの國がなつかしく、可愛くなつてきました。

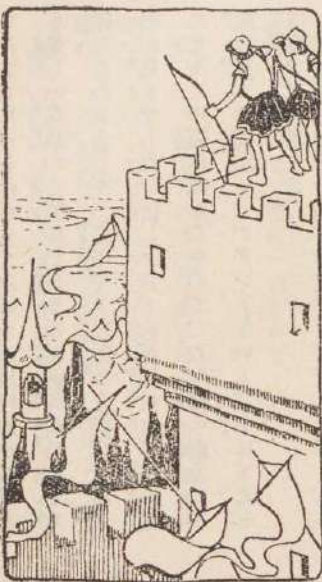
毎日會社が退けると、スラドンは大急ぎで歸つて来て、早速にこの不思議な窓の光景を覗き込みました。さうして日が次第にこの知らない街の上に乗れかゝり、やがて籠燈を掲げた夜番の兵卒が、柳の葉のかけや石壁の下を歩き廻り、さうして最後に奇妙な星を一杯に纏めた黒天鷲絨のやうな夜

が、すつぽり何もかも見えなく包んでしまふまで、餘念もなく見惚れてゐるのでした。

或晩、スラドンは偶と想ひ付いて、星座表を持つてきて、それと此不思議な街の上に燦いてゐる星とを見較べ、凡そ地球の何處邊に在る國だか知らうとしました。が、是も矢張駄目でした。なぜと云ふに、此街の空に見えてゐる星の形は、本に載つてゐるものとは全然違つてゐたからです。

四

朝も、目が覚めるや否や床を飛び出して、まだ顔も洗はないうちに、スラドンは真先にこの窓の處へ行きました。窓のなかの國ではもう夙に夜が明けてゐて、方々の高い塔の上にはいつもの黄金の龍の旗が明るい日光の中に勢よくひらめき、物見の塔の上では弓を持った武士たちが大欠伸をしながら、麗かな四方の景色を眺め



てゐました。それからまた遠くの川向ふのお寺とも  
も覺しい屋根の上では、巨きな鉦が朝の時刻でも  
報せてゐるらしく、鳥のやうに勢よく捲れてゐる  
のが見えました。併しストラドンが如何なる力を籠  
めてもこの窓は開かないので、たゞ鐘の動くのが  
眼に見えるばかり、グアン〜いふ其音はすこしも  
聞えて来ません。

けれどストラドンは、時渡つた青空に翻へつてゐ  
る大好きな黄金の龍の旗を見るだけで、もう心持  
がせい〜しました。そこで自分もすつかり元氣  
づいて威勢よく會社へ出かけて行くのでした。

ストラドンは時々この窓は鏡で、何處か後の景  
色が映るのぢや無からうか」杯とも考へては、會  
社の歸路に近所を探してみました。又恰度窓の下  
になる見當の、汚ない露次などへ入つてみたりし  
ました。が、矢張何の手掛りもつきませんでした。

ひました。柳の樹の生えた街路の家々の窓には、  
何時もより餘計人の顔が突き出てゐました。女が  
戸外で遊んでゐる子供達を慌て、家へ呼込んでゐ  
るのも見えました。遠くのお寺の屋根の上では鐘  
が引さちぎれるほど激しく捲れてゐました。

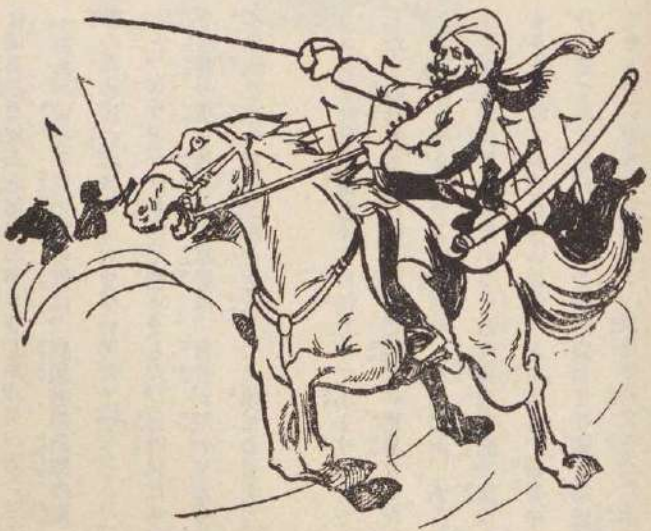
どうも總體に街なかが騒がしさうなので、スラ  
ドンは少々不安心になり、ひとわたり、ずつと方  
方の塔の上を見わたしました。が、いつもの黄金  
の龍の旗は變らず勢よく翻つてゐるので、やつと  
落付いてそのまゝ會社へ出かけました。

五

夕ぐれ、ストラドンは辻自働車に乗つて大急ぎで  
歸つてきました。氣になつて耐らないので階段を  
駆け上つて、矢庭に不思議な窓を覗いて見ました。  
窓の中の街には別段何の變事も起つてゐないや  
うでした。唯街を繞んだ城壁の入口の處に黒山の

一八  
八月の末ごろになりますと、この不思議な窓の  
中の國でもたいへん日が短かくなつたと見えて、  
ストラドンが會社から歸つてきて覗く時分には、い  
つも最早夜になつてゐました。それも大分夜更け  
になつてゐて、街の燈火もあまり見えませんが  
た。ストラドンはたいそう淋しく思ひましたが會社  
の仕事が忙しいのでそれより早く歸る譯にも行き  
ませんでした。

真中八月も過ぎて九月初めの或朝、出がけにス  
ラドンが何心なく窓の光景を覗きますと、少し變  
つた様子が目につきました。平常静かな街中には  
槍を持った兵卒がそこ〜に幾つも團つてゐまし  
た。中にはバラ〜大急ぎで街の入口の方へ駆け  
てゆくのも見えました。物見の上には弓を持った  
武士が今日は平常より多勢のぼつてゐて、頻りに  
何か相談し合つたり、又矢の數を勸めたりして



やうな群集が見えてゐるだけでした。物見の上  
には弓を持った武士達が平常のやうにぼんやり壁に

背中をもたせてゐました。あかあかとした夕日が遠くの櫓の蔭に沈まうとしてゐる處でした。

併し、ストラドンは直きに自分が見違へをしてゐた事に気が付きました。物見の上の武士たちはぼんやりしてゐるのでは無く、もう已に皆射殺されてゐるのでした。夕日の光を浴びた諸方の塔の頂上には、もう黄金の龍を描いた懐かしい旗は一寸も見えてゐませんでした。

ストラドンがこれに気が付いた、その途端、街の城壁の入口の處を固めてゐた眞黒な群集は、何かには逐はれたやうに右往左右に逃げ出しました。見るとこれは皆白地に黄金の龍を描いた旗、差物を押し立て、或は甲冑に身を固め、又は馬に跨つたこの國の兵卒どもでした。すると此時、城門を颯と押破つて突貫でもするやうにこれらの兵卒を追ひ詰めながら、街なかへと進み入つてくる違つ

た軍勢が現れました。見るとその先頭に立つた指揮官とも覺しい武者がかざした大きな狸々耕の旗には眞黒な熊が刺繍してありました。

『ああ、黄金の龍の旗の國は、到頭あの黒熊の軍勢のために亡ぼされてしまつたのだ！』

と、ストラドンは初めて覺りました。其時にはもう黒熊の旗を押立てた軍勢は、自分が覗いてゐる不思議な窓の眞下迄舞々と攻入つて來てゐました

六

ストラドンは口惜しくて口惜しくて堪りませんでした。昨日まであれほど静かな楽しい世界だつたこの國はもう今日ぎりで亡びてしまふのか、あれほど自分が好きで可愛がつてゐた黄金の龍の旗はもうこれなり見られないのか、と思ふと、自分の身を棄てても如何かしてこの可哀さうな國を助けたいやうな氣になり、思はず傍に在つた太

い鐵火箸をとり上げました。

今や黒熊の軍勢は街中に火をかけたと見えて、諸方の物見物見から濛々立ちのぼる黒煙と共に、眞紅な焰の舌が燃えあがりました。



『憎むも憎しー』

と思つたストラドンは、手に持つた火箸をふりあげると、吾を忘れて、恰度眼の下に見えてゐる黒熊の軍勢めがけて、撥矢とばかり擲付けました。

と、その瞬間に、懐かしい白地に黄金の龍の旗がもう一遍燃えたつ眞紅な焰の中にヒラ／＼と翻るのが見えたとと思ふと、がら／＼と凄まじい玻璃の碎ける音がして、今迄の眼前の光景も、不思議な窓も忽然と消え失せ、跡にはぼつかり蓋のとれた押入れの口が、觸體の眼のやうに明いて居るだけでした。

ストラドンは今ではもうずつと年をとつて、世間の事にも明るくなつてゐますが、折々この若い時分に持つてゐた窓のことを想ひだし、お金を山ほど積んでもいゝから最早一遍手に入れたいと望んでゐます。けれどあの不思議な老人は二度と姿を現さず、また可哀さうな黄金の龍の旗の國の運命が其後如何なつたか、知つてゐる人にもついで選送つたことがあります。(をばり)



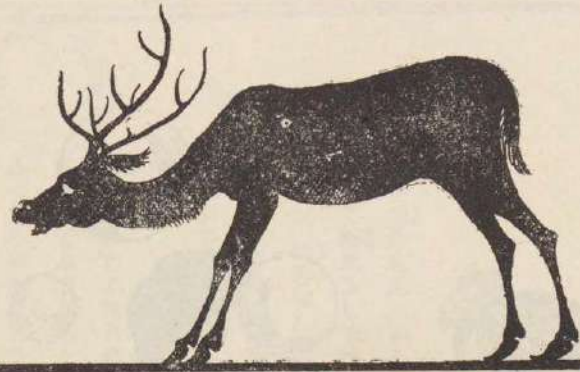


しゃぼん玉

茅野雅子

管の先からふわふわと  
 浮いて離れるしゃぼん球  
 大きな小さなしゃぼん球  
 ういてゆくのは何處たらう  
 空はいちめん董いろ」  
 細い管からふき入れる  
 私の息でふわふわと  
 ふくらみあがるしゃぼん球

春の光のまん中に  
 飛行船のよにとんてゆく」  
 そつと透かせは絹よりも  
 うすい五色の球のなか  
 私の息より出て来たか  
 小さい子供が二三人  
 天を見上げて笑つてる。



# 山六爺さん

(長篇童話)

沖野岩三郎

三

山六爺さんは、或日婆アさんとこんな事を話しました。

「婆アさん、一體此の家の財産はどの位あるのかい？」

「財産って何にも有りやしないぢやありませんか。私の着物もフダン着が二枚と、お祭りに着る木綿の一張羅がたった一枚。爺さん、あなたの着物も古い紋付が一枚と羽織が一枚あるだけで、山へ行く時着る其の古い襦袢が、一枚あるだけぢやありませんか。」

「困つたなア、婆アさん、俺はもつと出世がしてみたいよ。」

「出世？爺さん、あなたは出世して何になるつもり？」

「知れた事よ、俺は武士になつて、此村の殿様になりたい。」

「まア、爺さん、あなたは狂人になつたのぢやアないですか。」

「いゝえ、俺は狂人ぢやア無い。俺はこれから武士になるんだ。」

山六爺さんがあんまり、真面目に言ふので、婆アさんも可笑しくなつて、

「ては、爺さん、あなた武士になつて御覧よ。そして此の村の殿様になると、私も大へんうれしいと思ひます。」

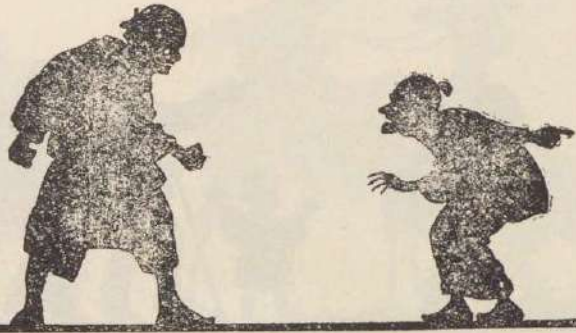
「よし、夫れでは今日から武士になる稽古を致さう。家來共これへ馬を引け……」

爺さんは俄かに武士のやうな言葉を使ひましたので、婆アさんは腹を抱へて笑ひましたが、爺さんは、ちツとも笑ひませんでした。こそで婆アさんは、面白半分に裏の小屋に繋いであつた大きな角のある鹿を引出して来て、

「殿様、お馬をこゝへ、引いて参りましたとござります……」と家來のやうな言葉で申しました。

すると、爺様は太い繩を鹿の角に結びつけて、夫れを手綱にして鹿の脊にひらりと打乗りました。爺さんは最う六十過ぎた骨と皮とに瘦せた老年ですから、鹿はビクともしないで平氣でゐました。

爺さんは大變喜んで、毎日／＼庭中を鹿に乗つて走り廻つてゐま





「もし〜山六爺さま、あなたはどうぞ、此村の殿様になつて下さいませんでせうか。」と云ひました。

「よろしい、では今日から、俺は此村の殿様になつて上げよう。」と山六爺さんは、鹿の背から言ひました。

村の百姓達は皆な面白半分に、路の上に座つて、山六爺さんを拜む真似を致しました。夫れを見た婆アさんも面白くなつて、次の日には、婆さんから、

「爺さん、村へ出て行きませう。爺さんがお殿様で、私がお家來で…はい、早く行きませう。」と云ふやうになりました。

所が或日、山六爺さんは斯う言ひました。

「やう婆アさん、毎日〜お前一人の家來では、どうも淋しい。今日は、家の家内皆なをつれて行かうではないか。」

「家内皆なとは？」と云つて、婆アさんは不思議がりました。

「黒も、狼も、皆なつれて行かうぢやないか。」

「夫れは面白うございます。では、さア皆な伴れて参りませう。」



したが、十日程たつと爺さんは、もう鹿に乗つて、村中をあちこちと走りあるきました。

子供達は山六爺さんが鹿に乗つて、威張つて來ると、

「ちうい、皆來い皆來い、お武士さまが、鹿に乗つて來たぞ……」と言つて、ワイワイと騒ぎました。

山六爺さんは嬉しくてたまらないから、早速家へ歸つて紙の旗を一本こしらへまして、翌る日夫れを婆アさんに持たして、村へ出て行きました。すると村の人達が多勢出て來て、

「ちうい、來て見る、山六爺さんが狂人になつたぞ、あのだまを見ろ……」と云つて騒ぎますので、山六爺さん少々腹が立つたのです。

で、大きな聲で、

「ちい〜、失禮な事をするな、俺は武士だぞ。此の通り鹿に乗つてゐる。此の通り一人の家來が旗を押立てゝゐるぢやないか。」と云ひました。

すると、村の人達は、爺さんも婆アさんも二人ながら狂人になつたのだと思ひました。で、皆なは、二人をからかつてやらうと思つ



「婆アさん、私は大層お腹が空いて来たから、何處かから、御飯を少し貰つて来てお呉れ。」と優しい聲で言ひました。

婆アさんは「黒」をつれて、紙の旗をもつたまゝ、百姓家へ行つて御飯を少しばかり下さいと頼みました。けれども、其の家には御飯が無いと申しました。

「お家には御飯を炊かないのですか。」と聞きますと、其家の婆アさんが、

「御飯を炊きたくとも、お米が無い。」と申しました。

「ではお麥があるだらう。」と聞きますと、

「お麥ありません。」と答へました。

「夫れでは、お諸があるだらう。」と聞くと夫れも無いと申しました。仕方が無いから、婆アさんは、山六爺ちんの所へ行つて、あの百姓の家には、お米も、お麥も、お諸も何にも無いと言ひました。夫れを聞いた爺さんは、ホロ／＼涙を流しながら、

「まア、可哀さうな家だ、其のツケを聞いて来い。」と婆アさんと言ひました。



二八

そこで、其日は「黒」が一番先に立つて、其次に婆アさんが旗を押立て、其次に爺さんが鹿に乗つて行き、爺さんの後には二足の狼が、ウーウ、ウーウ、と唸りながら、ついて行きました。狼の口には、人を咬みつかないやうに革の袋が着せてありました。

これを見た村の人達は吃驚して、皆な黙つて其の不思議な行列を眺めてゐました。

「おい／＼、八郎さん。山六爺さんは狂人でも何でも無いらしいよ。」

「どうして？」

「どうしてつて、あれを御覧、あんな恐ろしい狼でも、尻尾を垂れて、爺さんの家來になつてゐるでは無いか。」

「ねえ、九郎兵衛さんの仰しやる通り、山六爺さんは本當に偉いのかも知れないネ。」

そんな事を言ひながら、村の人達は爺さんの不思議な行列を遠い所から眺めてゐました。

所が、さうして村中をぐる／＼廻つてゐるうちに、爺さんはお腹が空いて来たので、御飯を食べたいと思つて、



婆アさんは又、紙の旗を持ったまゝ「黒」をつれて、其の家へ行つて、詳しいワケを聞きますと、其の家の婆アさんは斯う申しました。「私の家には田圃がありました。けれども去年の秋、其の稻を皆な鹿に食べられてしまひました。又畑から三斗程のお麥を取り入れましたが、夫れは皆な泥棒に盗られました。畑にお藪を作つてあつたが、夫れは皆な猪に食べられました。」

其の話を聞いてゐた婆アさんは、ボロボロと涙を流しながら、爺さんの所へ来て、

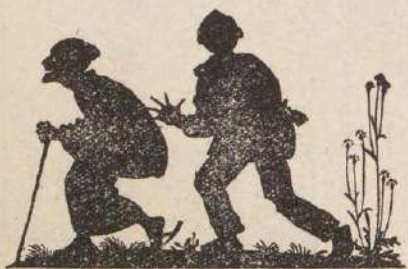
「あんまり可哀さうだから、あの婆アさんを助けてあげて下さい。」と、頼みました。

山六爺さんは、暫く考へてゐましたが、

「宜しい、夫れでは俺が助けてやらう。」と云つて、小高い丘の上へ駆け上つて、

「おうい、鹿に稻を食べられた者は、皆な此所へ来い。泥棒にお麥を盗まれたものは皆な来い。猪にお藪を食べられたものは、皆な来い。」と呼びました。

三〇



すると其の聲を聞きつけた村の人達は、十人二十人、三十人四十人と、つれ立つて、せろくせろくと山の上に登つて來ました。

山六爺さんは鹿の脊に乗つて、婆アさんは紙の旗を持つて、「黒」と二疋の狼とは其の前に、さちんと坐つてゐました。

多勢の百姓達は、草の上に坐つて、

「お殿様、何の御用でござりますか。」と尋ねました。(つづく)



# 逃げた雀のお話

灰野庄平

避暑地は海岸で、眺めのいい處でした。崖の上にあたり達の居りますお家があつて、お座敷から、あをい海が見えました。でもその海の岸まで行きますには、崖の路を降りて、大きな松の樹のどつさりある原を通つて、砂の上をかなり歩かなければなりませんでした。

毎朝早く、さうね、五時頃よ、嘘ですつて、ほんとうよ、去年の夏はほんとうに早く起きたのよ、その代り貴寮をしましたのよ。まあ五時頃ね、お母様と、小母さまと、あたしと三人、あたしが小さい籠を持つて、魚を買ひに出かけました。丁度漁師が舟をあけた時分、ザザア、ザザアと波が打つて居る處で、漁師があつちへ行つたりこつちへ行つたりして、魚のがんぢやうをして居ます。其處であたし達のお晝に頂くお魚を買ふのです。

これは階子さんのお話です。

一昨年しんねんの夏のことですから、あたしの七歳の時よ、學校へ入つてからはじめての夏休みでせう、今年は大さうおとなしく勉強をしたから、御褒美として避暑にやつてあげますつて、お父さまが仰しやつたの、お母さまと小母さまが御一所でしたの。お母さまは勉強もなさらないのに矢つ張り御褒美が頂けますのつて笑ひましたら、でも階子一人では寂しいでせうつて、笑はれてしまひました。お父さまはお務めがありますから、日曜だけいらつしやることになつて居ました。

でも、あたしには其お魚を買ふのより、松原を通ります時、いくら早い時でも、きつとチュツチュツと鳴つて居る雀が、なんだか懐かしくつて、小母さまに、早くいらつしやい、とせかれながら、いつも樹の上を見上げてはほんやり立つて居ました。チュツチュツつて云ふでせう、ほら又チュツチュツつてね、そして小さい首をちよつとひねるでせう。するとあの胸元の毛がたんぼよの様にふわふわとほゞけますわね、そして小さい眼をく

りつと動かして、チュツチュツ。何か云つてゐるんでせう、だげど分りませんわね。え？え？つて聞いてみるんですけど、只チュツチュツつて他の枝へ飛で丁だけでしたの。でも何だか可愛くつて、朝はそれが樂んで、眼がさめましたわ。これからお話なのよ。  
或日のこと、横になつて海を眺めながら、いつか晝寝をして丁たことがありました。すると、何だか、怒ろしい音がしますの  
で、吃驚して眼をさ



ましますと、お座敷が薄暗くなつて、戸外ではヒューヒュー風が吹いて居ます。雨戸はみんな閉つて居ました。何か心細くなつて雨戸の硝子から覗かうとしますと、雨がばらばらと、眼にぶつつかる様に硝子をたゞきつけて居ます。怖くなつて離れやうとすると、ビュウツツて風が唸つて、お家がゆら／＼と揺れるんでせう。泣き出し度くなつて、お母さまを呼ばうとしますと、お母さまが次のお産敷から出ていらして、そつと抱いて下さいました。そして、あらしはもう直ぐをさまりますよと仰しやいました。ほんとにいゝお母さまだと思ひました。

それから、おかあさまと、小母さまと三人で貝強きをして遊んで居りますと、誰が大勢で何か口々に云ひながら、お庭の外の道を通つて崖を下りて行きます。何だらうと思つて居りますと、お隣家のみつちやんと云ふ男の子が、外から戸を叩いて、松原に雀がどつさり落ちて居るから拾ひに行かうと誘つてくれました。雀と聞くと何だか氣の毒でたまらなくなりましたので、小母さまやお母さまが危いからと止めるのもきかずに駆け出しました。



戸外へ出ると雨はもう止んで居ましたけれど、風がまだ吹いて袂が袂の様に舞ひました。あたしはみつちやんの後へついてとんとん駆け出しました。可哀さうに啼いて居る事だらうと雀のことばかり考へて駆けつて居ました。松原へ行つて見ると、大きな樹の枝が裂けたり、下へ落ちたりして、もう子供が五六人走り廻つて居ました。みつちやんが、ほうら／＼つて教へてくれる處を見ますと松の根元に松ほつくりの様に黒いものが幾つも競つとも轉がつて居ります。よく見ると、それが皆な雀なのです。翅がぐしよぐしよに濡れて、風があんまりひどいので吹き落されて了つたのです。可哀さうに！お家へ連れて行つて暖めてやちうと思つて、そつと拾ひ上げると死んだやうになつて居たのが小さひ眼をあげました。でも逃げやうともしません。左の袂へ四羽、右の袂へ四羽、懐へ四羽そつと入れてやつて、お家へ歸つて来ました。

お母さまも小母さまも氣の毒がつて、直ぐお火鉢に火をかん／＼おこして、みんな火鉢の周圍へ集まつて、濡れた翅を乾かしてやりました。暫くすると、みんなぶる

ぶると身慄して、可愛らしい足で立ちましたので、籠の中へ入れてやりました。それからお米をまいてやりますと、だんだん小さい嘴で啄いては食べる様になりました。すこししますとその中の一羽が籠の中から出ました。他の十一羽も一羽出る、二羽出る、みんな出ました。戸外はもう嵐もやんで、晴れやかに日が照つて居ました。あたしは雀が嬉しさうにして居るのを見ますと、チュツチュツと云ふのが何か云つて居る様で、何だか話をして見たくつて堪らなくなりました。すると廊下へ出た雀がパツと飛び出しました。一羽出ると後から後からみんな戸外へ出て、松原の方へ飛んで行つて了りました。何だかあたしは寂しくなつてしまひました。

翌朝早く、昨日の雀が居るか知らと思つて一人で松原へ行つて見ました。松の枝にはやつぱし雀が啼いて遊んで居ましたけれど、それが昨日の雀かわかりません。みんな楽しさうに遊んで居ましたが、あたしの方を見てくれる雀は一羽もありませんでした。あたしは急に寂しくなつておかあさまのところへ歸りました。(まはり)



# 琴の太郎

(長篇風話)

小山内 薫

二

姫は曲を終りました。その様子を見ると、黒い著物の人は、にっこり笑つて、「姫。これ程そちの琴の音を慕ふ者を、一通りの

人間のやうに、油の海へ投げ込むのも不憚だ。そなたの遊び相手にして、この船へ止めて置かう。」と言ひながら、足音も立てずに、甲板の下へ降りて行つてしまひました。

太郎は目を開きました。そして、突然、

「姫様。今のは何といふ曲です。」

と訊きました。

姫は琴を離れて、太郎の側に立ちました。そして、美しい聲で、かう言ひました。

「今のは、魔の海の白鳥といふ曲です。それ／＼あのやうに空に澤山飛んでゐるでせう。この曲を弾くと、きつとあの鳥が出て来るのです。あれはみんなあたしの侍女なのですよ。」

「鳥の侍女ですか。一體お姫様。あなたは何なのです。」

「あたしはねえ。魔王の娘で、海原殿つ

て言ふんですよ。今こゝにゐたでせう。黒い著物を着て。あれが魔王なのですよ。でもねえ。あなたの名は何と言ふんです。太郎さん。さうですか。太郎さん、決してこゝは恐ろしい所ではないんですよ。あなたは子供ですしね。琴が好きですからあたしのお友達になつてゐれば好いんです。油の海へ入れられはしませんよ。」

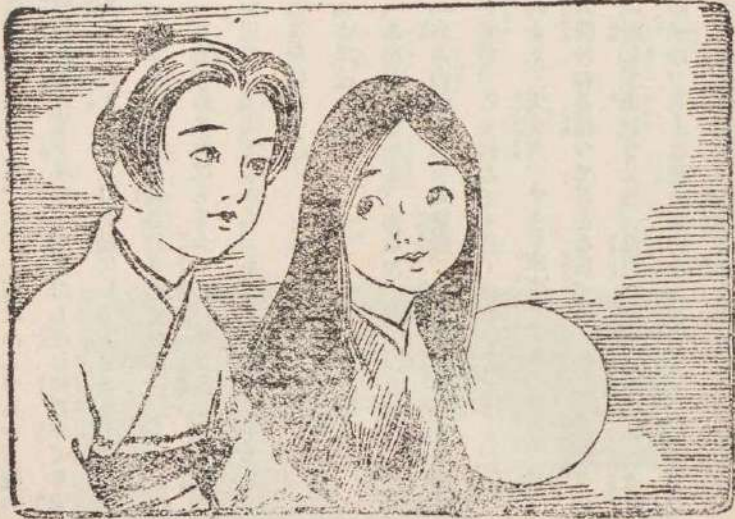
「油の海があるんですか。」

「ええ。太郎さんだから、皆話をしませうねえ。

此船は昔々百年許り前に、此島へ乗り上げた船なんです。乗つてゐた人達が皆海へ落ちて死んでしまつた後へ、あたし達が皆海へ落ちて死んでしまつた後へ、あたし達が皆海へ落ちて死んでしまつた後へ、あたし達の家來は二十人ばかりあるんですよ。」

姫は尙詞を續けました。

「油の海と言ふのは此船の廻りの海です。魔の海へ迷來て來た人間は、皆此中へ投込まれて殺さ





れてしまふのです。すると天にわらつしやる魔の神様が喜んで下すつて、あたし達を何百年でも安心して此處にゐられる様にして下さるんです。」「ちやあ、人間は殺されるんですね。」「でも、あなたはもう大丈夫。お父様からお許しが出てゐるんですから。あたしと遊びませうよ。あなたは幾つ。」「十二。」「あたしは十一よ。あなた、どこから来て。」「向ふの濱から。お姫様。太郎は琴を聞きたいんですが、こゝにゐても恐くはないんですか。」「ええ、大丈夫。みんな家来ですもの。太郎さん、人間のゐる濱つてどんな所です。話して頂戴な。」「話して上げませう。面白い所ですよ。みんな女の子は、そんな黒い著物なんを着ちやひませんよ。みんなねえ。縮緬で赤や青の花の模様が付いた。自分一人だけで、そつと今に逃げようと思つてゐました。其晩は甲板で、積の話をして明かしてしまひました。夜が明けると、姫は大急ぎで、太郎の手を引いて甲板を降りました。甲板の下は薄暗くて、その中に大勢の黒い影が見えました。姫は、すん／＼その中を通つて、やはり薄暗くはありますが綺麗な部屋の中へ太郎を入れました。そこには澤山の果物や海の魚を料理した皿が置いてありました。

てゐる著物を着てゐますよ。簪をさして、太郎は段々姫に馴れて来て、恐いのも忘れて、濱の話をし出しました。お祭りの事や、お大名の行列の事や、御殿女中の事や、お花見の事や、芝居の事や、面白い事ばかりを話しました。姫はその話を聞いてゐる内に、この寂しい船の中に黒い人達と一緒にゐるのが厭になつて来ました。そして、一度でも好いから、さういふ賑かな所へ行つて見たいと思ひ始めました。魔の姫と言つても、やつぱり女は女です。どうかして、そんな綺麗な著物を着て、お祭の中が歩きたいと思ひ始めたのです。」「そんなに好い所。行きたいわねえ。」「と、溜息をつくやうに言ひました。でも、太郎は魔王が恐ろしいので、姫をそのかして、自分も一緒に逃げようなどと、ば夢にも思ひませんでし

た。自分一人だけで、そつと今に逃げようと思つてゐました。

た。自分一人だけで、そつと今に逃げようと思つてゐました。其晩は甲板で、積の話をして明かしてしまひました。夜が明けると、姫は大急ぎで、太郎の手を引いて甲板を降りました。甲板の下は薄暗くて、その中に大勢の黒い影が見えました。姫は、すん／＼その中を通つて、やはり薄暗くはありますが綺麗な部屋の中へ太郎を入れました。そこには澤山の果物や海の魚を料理した皿が置いてありました。



板へ出て遊ぶ事が分かりました。

話を聞き聞かうとした。太郎は腹がすいたので、うんと食べながら、面白い話をして聞かせました。今度は江戸の繁華な事や、町娘の装や、見世物の事や、兩國の花火の事や何かを話しました。話が済むと、姫は又琴を弾いて呉れました。かうして一日二日ゐる内に、黒い影は晝間は甲板の下に隠れて、太陽の光を避け、夜になると甲

話を聞き聞かうとした。太郎は腹がすいたので、うんと食べながら、面白い話をして聞かせました。今度は江戸の繁華な事や、町娘の装や、見世物の事や、兩國の花火の事や何かを話しました。話が済むと、姫は又琴を弾いて呉れました。かうして一日二日ゐる内に、黒い影は晝間は甲板の下に隠れて、太陽の光を避け、夜になると甲



四〇

丁度三日目の日でした。太郎が姫の部屋で話をしてゐると、突然、厭あな、長い、あの島のやうな叫び聲がしました。すると、姫は立ち上がつて、「太郎さん。魔の海へ船がはひつたんですよ。」と申しました。

太郎はいきなり甲板へ駆け上がつて見ると、甲板には一人も人がゐません。それから、直ぐ前の

油の海を見ると、紫色をした水の中に、船が一艘ひつくり返つて、漁師が二三人油の水の中を泳いでゐました。

太郎は助けて遣りたいと思ひましたが、魔者の方が悪いので助ける譯にも行かず、一人で氣を採んでゐる内に、漁師は皆沈んで行つてしまひました。太郎はそれを見ると、愈々魔の世界が恐しくな

りました。そこで、どうかして逃出さうと思つて、それから逃る工夫計り毎日してゐました。

その間に、魔の方は魔の方で、毎日太郎の話を聞いてゐる内に、どうかして一日でも、この薄暗い魔の世界を逃れて、暗れやかな陸に暮らして見たいと思ふやうになりました。

或晩、姫は自分が約魔な着物を着て、お花見をしてゐる夢を見ました。或晩は又、お花の夢を見ました。でも、夢は櫻の花がどんな形をしてゐるのだから、お花といふものがどんなものだから、まだ知らないのです。太郎の語つて聞いたばかりなので、すから、櫻とは赤い花、お花とは綺麗な花だといふより外はなんにも知らないのです。

かういふ風にして日を暮らす内に、姫は太郎をこの上もない人のやうに、敬しがりました。太郎も姫を可愛らしく思つて、姫の手の指の琴に觸れ

るのを、唯一つの樂にしてゐました。それ故、太郎は若し自分がこの船を逃げ出す時には、あんなにも人間の國に焦がれてゐる姫を、決して見捨てては行かないと決心するやうになりました。たと一日でも、陸の景色を姫に見せてやりたい、ならぬ事なら姫を魔界から放してやりたいと思ふやうになりました。

姫ももうこの頃では、恐ろしい魔の世界のどんなに無情なものであるか、人間の世界のどんなに平和なものであるかを、おぼろげながら知つて来たものですから、自分もどうかして人間世界の人になりたいと思ひ始めました。

姫の心は段々魔界離れをして、やさしく、女らしくなつて來ました。さうなると、もう一日も黒い船にゐるのが苦しくなつて來ました。

二人は同じ思を打ち明けて、毎日逃げ出す相談ばかりしてゐました。(つづく)



## 大糸小糸

鈴木善太郎

一  
お糸のほんたうの母あさんが死んでから、間もなく、繼母あさんが来ました。この新しい母あさんは、お糸より二つ年下の娘を連れて、お糸の家に入つて来たのです。そしてその娘も矢張りお糸と云ふ名で、だから、お

四二  
父うさんはお糸を大糸と呼び、繼母あさんの連れ子の方を小糸と呼びました。

大糸は器量もよく、誰にでも好かれるのに引換へて、小糸の方は不器量で、意地悪でしたから、人から好かれませんでした。新しい母あさんはそれを面白くなく思ひました。大糸はいつも浴飯ばかり食べさせられて、どんな寒い日でも、谷底まで水汲みに出されました。小糸は温かい御飯を食べ、火鉢に寄り附いた儘で、少しも働かませんでしたが、それでゐる大糸は毎日母あさんに吐られ、小糸は誰よりも可愛がられました。

ある時、お父うさんは遠い國へ旅に出掛けなければならなくなりました。

「大糸、お父うさんは少し留守になるよ。今度のお母あさんはお前に辛く當るかも知れないが、辛抱してゐなさいよ。お父うさんは大急ぎで用を済まして歸つて来るからね」とお父うさんは大糸を呼んで云ひました。

「いゝえ、母あさんはほんたうに優しいわ。心配しないで、送り行つてらっしゃい」と大糸は云ひました。

二

お父うさんが旅に出た次の日、雪が降りました。山も谷も一面に真白になつて、氷が固く張り結めました。小糸はすっかりかちけて了つて、火鉢にしがみついたきりで「寒いわ、寒いわ」と慄へてゐました。



母あさんは簞笥の中から紙の着物を出して来て、「母あさんは母が食べたくなつたから、この着物を着て山へ行つてお出で」と大糸に云ひました。そして無理矢理に大糸の着てゐる綿入を脱がせて、紙の着物を着せました。

「母あさん、今時分山に荷なんぞありやしませんわ。戸外はこんなに雪が降つてゐるんですもの。それに今日のやうな寒い日に、こんなペラ／＼の紙の着物なんぞ着て山へ行つたら、どんなでせう。風には吹き卷られるし、木の枝や、切株に引掛つて、メチャ／＼に破けて了ひますわ」と大糸は驚いて云ひました。

「お前は又母あさんに口答をするんですね。行きたくなけりや行かないがいゝよ。もう家へは置きやしないから」と母あさんは腹を立てて云ひました。

けれども、大糸がすぐ優しく詫言つて、「母あさん、御免なさい、私が悪うございました。私すぐ行つて来ますわ」と云ひましたので、母あさんは機嫌を直し、小さな御飯を一つ大糸に呉れました。

「さア 行つてお出で。これで今日一日食べるだけは充分なんだよ。」と母めさんは云ひました。

### 三

大糸は母めさんから貰つた小さな握飯を一つ持つて、紙の着物を着て山へ出掛けました。何處も彼處も雪が真白に降つてゐて、葎などは見當りさうもありませんでした。そして冷たい風が粉のやうな雪を吹き捲つて、大糸の頬に打つ附けて來ました。その處に大糸の立てる紙の着物がカサカサと音を立て、裾から捲り上げました。大糸は凍えて死んで了うのではないかと思ひました。大糸は堪らなくなつて、雪の中に坐つた儘シタ／＼泣いてゐました。

「お嬢さん、お嬢さん」と誰かが呼ぶ聲が大糸の耳元に聞えました。大糸は振り返つて見ると、小さな一寸法師がいつの間にか大糸のうしろに來て立つてゐました。

「私を呼んだのはお前さんの？」と大糸は泣くのを止めて云ひました。

三つに分けて、三人の一寸法師にそれ／＼分けてやりました。三人はさも美味しさうにそれを食べました。

「あゝこれで漸くお腹がくつちくなりました。けれどお嬢さんは只一つしか無い握飯を私達三人に分けて下さつたから、御自分で食べる分が足りなくなつて、お氣の毒ですネ」と一人の一寸法師が云ひました。

大糸は首を振りました。

「いえ、私はこれで充分よ。御飯を食べられない人の事を考へると、どんなに少しだつて、食べられるだけ有難いと思ふわ。私ももうお腹がぐちくなつた事よ」と大糸は優しく云ひました。

すると三人の一寸法師は、



「そんならお嬢さん、私達の家の前の雪を少し掃下さしませんか」と云つて箒を持って來て、大糸に渡しました。大糸は素直に云ふ事を肯いて、戸外に出ました。すると三人の一寸法師は「あの

「さうです。だつてお嬢さん、こんな處に泣いてゐたらすぐ凍え死んで了ひます。早く私達の小屋へ行つしやい。何も御馳走は無いが、火丈けはどん／＼焚いて、暖かにしてありますから」とその一寸法師は親切に云ひました。そして先に立つて、自分の小屋へ案内して行きました。その小屋は小さくて、大糸には逆も立つた儘では這入れませんでしたから、屈んで這入りました。すると小屋の中にはその一寸法師の弟達が入りて、もう寒さの爲めに手足が痺に利かなくなつてゐる大糸を、圍爐裡の隅へ連れて行きました。

大糸はすぐ暖かになりました。すると急にお腹が空いて來ましたから、握飯を出して食べようと思ひました。

三人の一寸法師はデロ／＼見てゐました。

「お嬢さん、お嬢さん、私達にも少し分けて下さいな。

私達は雪に降り込められて、食べる物を町まで貰ひに行き事が出来なくなつてゐるのですから」とその中の一人が盛らなさうに云ひました。

大糸は首肯いて、その握飯を二つに分け、その半分を

お嬢さんは行儀もいゝし、素直な優しい娘だから、何を遣る事にしよう」と相談を始めました。一番上の兄は「私はこの子が日益しに美しくなるやうにしてやらう」と云ひました。中の兄は「私はこの子に葎を澤山やらう」と云ひました。そして一番末の弟は「私はこの子が口を利く度に小判が濡れるやうにしてやらう」と云ひました。

大糸は三人の一寸法師達

が家の中でそんな相談をしてゐるとは知らないで、セツセト云はれた通り家の前の雪を掃いてゐますと、白い雪の下から不思議に赤く熱した毎がころり／＼と出て來ました。大糸はもう嬉しくて堪りません。それをすつかり拾ひ集めて、一寸法師に禮を云つて、どん／＼自分の家へ馳けて歸つて來ました。

#### 四

大糸は家へ歸つて、門口から元氣よく「只今！」と云ひました。するとホロリと小判がその口から落れました。それから山の中で逢つた一寸法師の話をしてゐますと、口を利く度に小判がホロリ／＼と落れました。見る／＼室中が小判で埋まりさうになりました。

繼母あさんはもう今頃山の雪の中で、大糸が凍え死んで了つたらうと思つて、喜んでゐましたのに、大糸は不思議にも莓を澤山持つて歸つて來た上に、口を利く度に小判が落れるのですから、すつかり驚いて了ひました。小糸は姉の大糸の事が羨ましくなりました。そして自

ら、家の前を奇麗に雪を掃いて下さいませんか。私達は皆お腹が空てるて掃けないんです」と云ひ出しました。すると、小糸はブン／＼して「駄よ。掃きたかつたら



分も山へ莓を探しに行つて來たいと云ひました。「いゝえお前なんか山へ行つたら、すぐ凍え死んで了ひます」と母あさんが止めましたが、小糸はどうしても聞きませんので、母あさんは小糸に立派な毛皮の着物を着せ、それから美味しい御辨當やお菓子も澤山持たせて出してやりました。

小糸は山へ行きました。間もなく一寸法師の小屋が見附かりましたから、その家の中へ這入つて行きました。小糸はすつかりお嬢さん氣取りで、大威張りに威張り、一寸法師達には挨拶もしないで圍爐の側に進み寄りました。そして御辨當やお菓子を一人でムシヤ／＼食べ始めました。

一寸法師達はそれを見ると「お嬢さん、お嬢さん、私達にも少し分けて下さいませんか」と云ひました。

すると小糸は「あら、駄だ、私にだつて足りないんですもの」と云ひました。そしてたうとう一人でみんな食べて了ひました。

そこで一寸法師は「お嬢さん、そこに毒がありますか

自分達で掃いたらいゝぢやないの。私はお前さん達の女中ぢやありませんからね」と云ひました。

三人の一寸法師は相談を始めました。そして「あの子は何て根性の悪い、いけない子なんだらう。私達はあの子が日益に不器量になる様にしてやらう」と云ひました。小糸は戸外に出て方々莓を探しましたが、莓はどうしても見當りませんでした。小糸はブ／＼憤つて家に歸つて來ました。

「姉ちゃんの嘘つきい山へ行つたつて何處にも莓なんぞ無いぢやないか」と小糸は家に馳けて入りながら嗚咽り立てました。

そこで母あさんはすつかり憤て了ひました。可愛い娘の小糸をこんな目に逢せたのは、繼つ子の大糸の爲だと思ひました。そして大糸を殺して了はうと謀らみしました。そこへお父うさんが旅から歸つて來ました。お父うさんは母あさんの謀らみを知つて、母あさんと小糸を出して了ひました。大糸はお父うさんと二人で楽しく暮らす事が出來ました。(をばり)

よしきりのうた

若山喜志子

次郎さん太郎さんあれおき、

大風 小嵐

どんと風わたる

水神様の章やぶで

よしきりまいが啼いてゐる



蛙さきいことないてゐる

今に夕立降ろぞいな。

次郎さん太郎さんあれおき、

夕焼 小焼

河原の河原のまんなかの

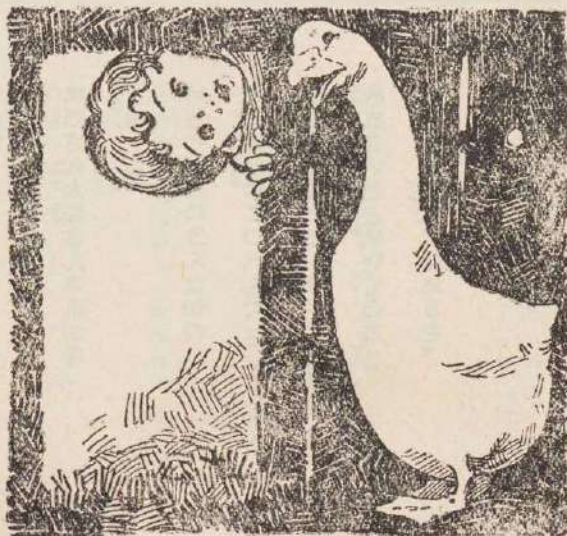
お伊勢揃のてつへんで

よしきりまいが啼いてゐる

赤いきいこと啼いてゐる

明日はお天気になあぞ。





## 聾の家鴨

(推察童話)

齋藤 素果

五〇

廣い池に、真白い奇麗な家鴨が二羽飼はれてゐました。二羽とも雄で大層よく似てゐました。その中の一羽は、少し聾で殊に人間の言葉は少しも判りませんでした。一羽は人間の言ふ事もよく判るし、その上意地悪でありました。

毎日三度づゝ男の子が来て、池の邊りの土の上に餌をまいてやります。すると先づ、意地悪の家鴨が上つて、餌のいゝのを食べてから、聾の家鴨を呼ぶことになつてゐました。それは意地悪の家鴨が、

「人間が餌を呉れる時、うつかり行くと捕へて殺される。だから僕が先にあがつて、人間の話をきいて危くなかつたら、君を呼んでやる。」

と言つて、いゝ加減に聾を騙してゐるのであります。聾の家鴨は、それと知らずに親切な友達だと喜んで、何時も残りの不味い餌をたべてゐまし

た。男の子は、あの家鴨は自分に馴れないのだと思つてゐました。

或る日の夕方、男の子のお父さんが、池の邊りに来て餌をまきながら、

「この家鴨は二羽とも、一つも卵を産まないから今日は一羽づつめて食べるかな。」

と獨り言を言ひました。それをきいた意地悪の家鴨は、

「オイ君、今日は大丈夫だから、連れだつて上らう。」

と、聾の家鴨に言ひました。聾は喜んで、二羽連れて上つて餌を食べてゐると、お父さんは、だしぬけに手を差し伸べて、家鴨を捕へ様としました。意地悪の家鴨は、さつきから氣を付けてゐたので、急いで池の中に飛び込みま



した。捕へられたのは、聾の家鴨でありました。聾は驚いて、ガア／＼と變な聲をあげて鳴きました。其聲を聞つけて、男の子が馳けて來ました。「お父さんその家鴨どうするの。」と男の子が問ひました。お父さんは、

五一



「卵を産まないから、めめて食べるのだよ。」  
と言ふと、男の子は、

「その家鴨は可哀さうですから、許してやつて下さい。もしめめるのなら、あのお池にゐる方にしてお下さい。あれは僕に馴れないで、餌をまいても仲々お池から上つて来ませんから。」

りに心配してゐる内に、日がとつぷりと暮れて仕舞ひました。そこで自分は鳥小屋に入らないで、いゝ加減な事を言つて聲だけを鳥小屋に歸らせました。そして、今に聲が殺されるだらうと思ひながら、意地悪の家鴨は、池の隅の蓮の葉の蔭に眠りました。

その晩、お池の方で、ガア〜と苦しうな家鴨の鳴聲が聞えるので、お父さんと男の子が急いで行つて見ると、一羽の家鴨が血まみれになつて池の邊りに斃れてゐました。

「躰にやられたのだ、しかし丁度よかつた、脚に布のない方だよ。」

と、お父さんが言ふと、男の子は小屋の中を覗いてみて

「お父さんこの家鴨にも布がありません。」

と頼みますので、お父さんも馴れない家鴨をせめる事にして、聲の家鴨の脚に小さな布ぎれを結んで池に放しました。

「かうして置いて、今晚鳥小屋に入つた時に、足に布のないのを捕へるのだ。」

と言ふお父さんの言葉を、意地悪の家鴨は池の中からさいて、吃驚しました。そして又、悪智慧を出して、聲の家鴨に言ひました。

「君大變だ、その脚の布は今晚殺される目じるしだよ、早く解いて仕舞ひたまへ。」

何も知らぬ聲は、「有りがたい〜」と言ひながら嘴で啄ははじめました。意地悪も、親切らしくそれに手傳つて、遂々布を解き放しました。すると、意地悪の家鴨は、その布を後でこつそり拵つて、自分の脚に結ばうとしました。けれど、嘴では仲々布が結ばませんでした。意地悪の家鴨が頼



と言ひました。(をばり)





### 木曾義仲の最期

窪田 空穂

京都に陣を張つて軍の様子を心配してゐた木曾義仲の處へ戰場から使の者が引續いて來ました。

「宇治は破られました。」

「瀬田は破られました。」

と、使の者は口々に云ひました。間もなく、

「鎌倉の軍勢はもう、賀茂河原まで入り込まました」

「義經殿は、六條の法皇の御所へ參つて守護されてをります。」と別の使の者が來て知らせました。

「かう負けだしては、とてもかなはない。深く討死をしよう」と義仲は思ひました。若し軍が負け

さうだつたら、法皇の御供をして中國の方へ逃げて、平家と一しよになつて鎌倉勢と戦はうと思つたが、義經が御所を守護してゐてはそれも出來なう。もう深く討死するよりほかは無う。

義仲はかう覺悟をして、軍勢を率ゐて賀茂河原へ出ました。見渡すと、使のいつた通りに、河原はもう一面の鎌倉勢です。そして敵の者は、此方を見懸けると直ぐに、我こそ打取つて手柄にしよと、鬨の聲をあげて取圍んで來ます。義仲の軍勢はそれと戦ひながら、河原に沿つて逃げまし

た。だが戦ふたびに此方の軍勢は減つて行つてしまつて、五六廻も戦ふと、もう唯の七騎となつてしまひました。

鎌倉勢は、義仲は負けると長坂を通つて丹波へ逃げるか、それとも龍華越えをして近江へ逃げるかするだらうと思つて居ました。だが、懸引をすることの少ない、三十歳を少し越したばかりの義



仲は、その時にはもう後の事などは考へずに、同じ討死をするならば、乳兄弟の今井兼平と一しよにしたいものだ、その事ばかりを思つてゐました。義仲は涙をばらはらと落して、

「かうなると知つたら、兼平を瀬田へ遣るのはなかつた。子供の時から死ぬなら一しよに死なうと約束をしてゐた。別々に

死ぬだらうが、それが悲しい。それにしても、兼平が何うなつたか聞いて見たいものだ。」  
義仲はさう云ひました。そして兼平の向つた瀬田の方へ行かうとして、今は敵から逃げようとはせず、敵の大軍の群つてゐる方へと、唯七騎で進んで行きました。

義仲は賀茂川を渡つて、栗田口を通り、松坂を通つて、敵にも逢はずに近江の大津の打出の濱まで来ました。去年信濃を出た時には、五萬餘騎を率ゐて、僅のあひだに平家を京都から追つてしまつて、朝日將軍と云はれた義仲は、今は琵琶湖の阪とりに、一月末の日に照らされて、寂しい、あはれなものに見えました。

今井兼平は八百餘騎で瀬田を守つてゐましたが負けて、五十騎ばかりになつて、眼立たないやうに旗を捲いてしまつて、此方へと来ました。間が

「是だけの軍勢があれば、最後のひと軍の出来な

事はない。あすこに集つてゐるのは誰の軍勢だ」

「田斐の一條の次郎殿の軍勢ださうです。」

「何れ程の軍勢だらう。」

「六千騎餘りだといひます。」

「それだと何方にもい、敵同志だ。同じ死ぬなら

大勢の中へ駆け込んで、い、敵に逢つて討死しよ

う。」

さう云つて義仲は、眞先に立つて向つて行きました。その日は義仲は、赤色の錦の直垂を着、唐綾織といふ鎧を着て、鍔形の甲を被つて、鬼草毛といふ名の木曾で生れた馬に乗つて居ました。敵の陣に近づくと義仲は鞍の鎧を踏ん張つて大聲をあげて、

「音にだけ聞いてゐた者を、今こそ目に見ろ、朝日將軍源義仲だ甲斐の一條の次郎だと聞く、

一町ばかりになると、義仲も兼平も、それと分つて、馬を駆けさせて近づきました。義仲は兼平の手を握つて、

「おれは六條河原で討死をするところだつたが、お前が氣になるので、敵に後を見せて、こゝまで連れて來たのだ。」

「有難うございます。手前も瀬田で討死をするべきでございましたが、あなたの御身が氣に懸りますので、これまで連れてまわりました。」

「まだ二人の縁が盡きないのだ。義仲はさう云つて「おれの軍勢で、この邊の山や林に隠れてゐる者があらう。お前の旗を掲げさせて見る。」

兼平は云はれたやうに旗を掲げました。するとその旗を目あてに、京都から逃げて來た者、瀬田から逃げて來た者などで三百騎ばかりになりました。義仲は非常に喜びました。

義仲を討つて頼朝に見せてやれ。」

「あの名のりは大將軍だ。それ、討取れ。」

敵は大勢で取圍んだ上、我こそ討取らうと思つて進んで來ました。

義仲の三百騎は、敵の六千騎の中へ駆け入つてさんざんに戦つて、一と先づ後ろへ引揚げて見ると、ただ五十騎残つたばかりで、あとはみんな討死してしまつてゐました。

義仲は五十騎を率ゐて前へ進むと、土肥の實平が二千騎で食ひ止めました。それも破つて前へ進むと、續いて、あすこには四百騎、ここには二百騎といふやうに敵は限りもなくありました。そして今は義仲の軍勢は、義仲まで加へて唯五騎になつてしまつてゐました。

「もう此れまでだ」と義仲は思ひました。そしてその五騎の中に、巴の居るのを見て、



「お前は女のことだから、早く何所へても逃げて行け。おれは討死をするか、それになければ自害をする。義仲が最後の軍に、女を連れてゐたと云はれるのは、臆病のやうで残念だから。」

この巴といふ女は、義仲が信濃の木曾から連れて来た者でした。色白で、髪も濃く綺麗な女でしたが、馬に乗ることが上手であばれ馬に乗つて、どんな険しい所でも下りました。又刀を持たせると、どんな強い者とも戦つて負けたことがありません。それで何時の軍にも、鎧を着せて一方の大將にしてゐました。今日の戦でも、僅か五騎残つた中の一騎となつて残つてゐたのでした。巴はさう云はれても、逃げようと思いませんでしたが、義仲に何度も云はれると

「それでは木曾殿に、最後の軍をしてお目に懸けて、その上の事にしよう。いゝ敵が来ればよい。」  
さう思つて待つてゐますと、武藏の御田の師重といふ非常に力のある男が、三十騎ばかりを率ゐて向つて来ました。巴はその軍勢の中へ駆け込んで行き、第一に師重と馬を並べて組打をし、相手の馬から落し、自分の馬の鞍へ押へつけて、少しも動けないやうにして置いて、首を取つてしまひました。その後で、鎧を脱ぎ棄てて、義仲に云はれた通りに東國の方へ向つて落ちて行きました。その時の戦で、義仲と今井兼平とただ二人ぎりになつてしまひました。義仲は兼平に向つて、  
「よだんは何とも思はなかつた鎧が、今日は何うしたものか重いやうな気がする。」  
と云ひました。兼平は、  
「お體もまだ勞れては居ませんし、お馬も弱つて

はゐませんのに、何だつて急に、鎧ぐらゐを重いとお思ひになるのでせう。これは多分身方の者がなくなつたので、臆病な氣が起つたからかも知れません。それなら兼平一人を、千騎ともお思ひなさいまし。ここにまだ射残した矢が七筋八筋あります。これで暫く防ぎませう。あれ、あすこに見えます、あれは栗津の松原と申します。あなたは彼所へ入らして、靜かに御自害をなさいまし。」と云つて進んで行く中に、又五十騎ばかりの新しい敵が現はれて来ました。

「手前はこの敵を暫く防ぎませう。あなたはあの松原へ入らつしやいまし。」

兼平がさういひますと、義仲は、  
「六條河原で討死にするのを、お前と一しよに討死したさに、敵に後ろを見せて逃れて来たのだ。別々に討死するより一しよにしよう。」

と云つて、兼平と馬の鼻を並べて、敵に向つて駆け出さうとしました。兼平は馬から飛び下りて、義仲の馬の轡をつかまへて引き留めて、涙をばらはらと落して云ひました。

「武士はふだんは何のやうに名高くても、死際が見苦しくては、後々までも恥となりませす。お體も勞れてをります。お馬も弱つてをります。日本中に神のやうに云はれた木曾殿が、名も無い者の家來なぞと組打をして負けるやうなことがありましては残念です。どうぞ我慢をなすつて、あの松原の中へ入らつしやいませし。」

『では、さらばだぞ。』  
義仲はさう云つて、唯一騎で、松原を指して駆けて行きました。

今井兼平は引返して、敵の五十騎の中へ駆け込んで、鎧を踏んで立つて、



尻を打つても動きませんでした。さうしてゐる間も義仲は、兼平の事が氣になるので、振り返つて後ろを見ました。その時、義仲の後

「木曾殿の乳兄弟、今井の四郎兼平だ。鎌倉殿にも御存じだらう。討取つて御覽に入れろ。」

さう云つて、射殺した矢を八筋射ると、敵の八騎が馬から落ちました。矢がなくなると兼平は刀を抜いて切つて廻りましたが、立ち向ふ者はありませんでした。敵は

「射てしまへ、射てしまへ。」  
と云つて、遠くから頻りに弓で射ましたが、鎧がよいので裏までは射通さず、疵もうけませんでした。

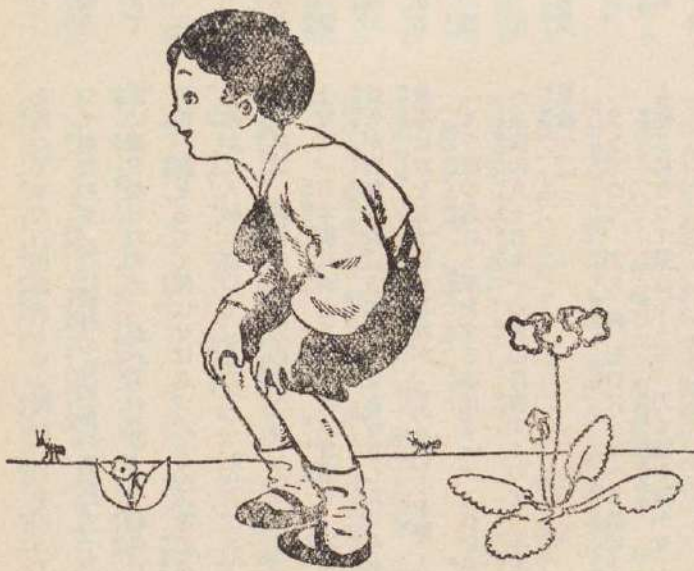
義仲は一騎で、栗津の松原を指して馬を駆けさせて行きましたが、その時はもう夕方、道がはつきり見えませんでした。或る田へ薄氷の張つてゐたのを、たゞの田だと思つて馬を駆け入れさせると、それは深い泥田で、馬は首の所までも泥の中へ入つてしまひました。馬は腹をあふつても、

を追つて来た石田爲久といふ敵が、弓を引さしほつて射たので、矢は義仲の額の上へあたりました。深い疵を受けたので、堪へられなくて、義仲は馬の鞍へ顔をあてて俯伏せになつたところを爲久の家來が二人駆け寄つて、首を取つてしまひました。爲久は、義仲の首を刀の先へさして、高く差し上げて、「日本國に神とも聞えた木曾殿を、石田の爲久が討取つた。」と名のりをあげました。今井の兼平は軍をして居ましたが、その名のりを聞くと、「もう誰の爲にも軍をする事はない。これを見給へ東國の人々日本一の者の自害するのを、手本に見給へ。」  
さう云つて、刀の鋒を口にくはへて馬の上から逆さになつて飛び下りて、刀で體を貫かせて死にました。  
(長編歴史童話の内「義仲の最期」をばり)

蟻地獄 (推奨童話)

坂田露香

穴にかくれて  
虫を待つ  
こはい小虫の  
蟻地獄



昨日も今日も  
一昨日も  
こはい小虫の  
蟻地獄  
蟻は見向きも  
せずにゆく  
こはい小虫の  
蟻地獄





# ガンガン王

横山 壽 篤

大層獵の好きな王様がありました。いつでも銃を肩に山や林を狩り歩いて、自分の園内の山と云ふ山、林と云ふ林は、悉く狩り盡しました。そこで鳥でも獸でも、ずん／＼他所の園へ逃けて行つて、春が来ても、此園の人々は、美しい小鳥の啼りを聞くことさへ出来ませんでした。かうして王様は毎日鐘砲をガーン、ガンと放してゐましたので、ガンガン王と云ふ名前がついてゐました。小鳥は鳴かなくとも、野にも山にも春が来ました。今まで眠つてゐた草や木は、麗かな春の日の光に呼び醒されて、青い芽を萌き、赤い花を咲かせて地上を飾りましました。ガンガン王は、もうちつとしてゐる事が出来ません。襟に似合ひの軽い獵服を着て、重い銃も軽さうに、林か

ら林を馳走りました。併し俄に小鳥が飛んだと思つてよく見ると、それは木の葉の一片でした。獸が蹲居つてゐるのかと思つて、よく／＼見定めると、それは岩でした。ガンガン王は、かうして何度も／＼がっかりしました。けれども、居ない鳥や獸を探し廻るのが却て面白くなつたので、疲れもしません、嫌にもなりません。お年ごろ、ガンガン王は林の中で、木の根に腰を下して休みました。陽炎が、そこいら一ぱいに燃えてゐました。花の香がたゞよつてゐました。可愛い蝶が、楽しんで飛んでゐました。ガンガン王は腰に提げてゐる網の中から、パンを取り出して食べ初めました。お腹が空いてゐるので、大層おいしさうでした。

「あゝ、おいしい。」とガンガン王は思はず云ひました。すると何處からか、

「さうでせうね」と云ふ聲が聞えました。

誰もゐないと思つてゐたのに、「さうでせうね」と云つた者があるので、ガンガン王は吃驚しました。そして其處等中を見廻しましたが、矢張誰もゐませんでした。

「可笑しいね、確かに聲がしたが……」とガンガン王は不審さうに見まはしながら云ひますと、

「確かに私が物を云ひましたもの」と又、前と同じ聲が云ひました。

「ハテナ、變だぞ。」とガンガン王はパンの一切を持つたまゝ立ちあがりました。すると

「私に其パンを下さいな」と云ふ聲が頭の上でしました。

ひよいと仰のいて見ますと、すぐ頭の上の木の枝に、一羽の大鷲が止つてゐて、そこからガンガン王を見下しながら、物を云つてゐるのです。

ガンガン王は、餘り不意なので、ぎよつとしましたけれども、直ぐに銃を取り上げて、鷲に銃口を向けました。

「王様、私は何も悪いことはいたしません、どうぞ命ばかりは助けて下さい、そして其パンを下さいな。」と鷲が云ひました。

獵に慣れてゐるガンガン王も、俄かには引金を引き兼ねました。そして「この鷲は、逃げはしない。」とかう思ひましたので、狙ひを止めて、



「お前は、どうしてそんなに命が惜しいのだ。」と聞きま  
した。

「私はお腹が空いてゐるのです。どうせ死ぬる程なら、  
王様の手に拵つて死にたいのですけれど、お腹が空いて  
ゐては、死にたくも御座いませぬ。そのパンを下さいな」と  
鴫は悲しげな聲で云ひました。

ガンガン王は、又銃を取り直しました。そして鴫の胸  
元に狙ひを付けました。「隙を見て逃げようとするのだ  
な」と思つたからです。

「私は逃げはしません、どうぞ命ばかりは助けて下さい。  
そしてそのパンを下さいな。」と鴫は如何にも落ちついた  
聲で云ひました。

ガンガン王は、又狙ひを止めました。そして

「お前は何故そんなにお腹が空いてゐるのだ、鴫の癖に。  
雀だつて何だつて捕へて食べたらいゝではないか。」と云  
ひますと、

「だつて、小鳥はみんな、王様の獵物を恐れて、他國へ  
逃げて行きました。私にそのパンを下さいな。」と云ひま

した。

ガンガン王は「こんな好い獲物を逃したら、もう二度  
と見つけることは出来まい。」と思ひましたので、こんど  
こそは撃つて了はうと、三度目の銃を取り直しました。

「王様、どうぞ命ばかりは助けて下さい、その代り私は  
王様にどんなお禮でもいたします、そのパンを私に下さ  
いな。」と云ひました。ガンガン王は、今度は狙ひを止め  
ませんでした、鴫の胸元を狙つたまゝ、

「お禮をする？どんなお禮でも……」

「どんなお禮でも……王様、あなたは私の脊中に乗つて  
空を飛んで見たいとお思ひになりませんか。其パンを  
私に下さいな。」と鴫は木の枝から下へおりて來ました。

ガンガン王は鴫の脊中に乗つて空を飛んで見たくなり  
ましたので、銃を其處に立てかけて、足許に落ちてゐる  
パンを鴫に與へました。鴫は大層喜んで、そのパンを食  
べました。

「それでは私の命を助けて下さいますか。」とパンを食べ  
をはつた鴫は、ガンガン王に訊ねました。

「助けてやる、助けてやる代りに、脊中に乗せて空を飛  
んで見せてくれるだらうね。」

「承知しましたお安い事です。さあお乗りなさいませ。」  
ガンガン王を乗せた鴫は、大きな翼を擴げて、羽音高  
く空に舞ひ上りました。

「どちらへ参りませうか。」と鴫は、人力車がお客にきく  
やうにいひました。

「何處へでも好い、氣の向いた方へ飛んでくれ。愉快だ  
なあ。さつきはお前を撃たうとして悪いことをした。私  
は鳥でも獸でも何でも撃つことが大好きなものだから、  
ついお前を見たら撃ちたくなつたのだ。おゝ、あの森が  
もうあんなに遠くなつた、あんなに小さくなつた。愉快  
だなあ。お前をあの時撃つて了つたら、こんな愉快なこ  
とは出来なかつたのだ。あゝ海だく、海が見える、上  
から見ると森も海も奇麗なものだね。」とガンガン王は大  
層喜びました。

「さうでせうね、私共は始終高い處から見てをりますか  
ら、何を見ても、さう別に奇麗だとも思ひませぬけれど



……それでは海の上を少し飛んで見ませうか。」と鷲は云つて、もの海の方を指して飛んでみました。

「それは面白いに違ひない。併し餘り高い處を飛ぶと危いから、成るべく低い處を飛んで貰ひたいね。」とガンガン王は云ひました。

「大丈夫です、私がついてるますから。」と鷲は云つて、ますます高く飛んで行くのでした。

「おや、もう海の上だね。」とガンガン王は顔へこるで云ひました。

見下す青い海には、かなり大きな波が打つてゐました。今日に限つて、海には船の影一つ見えません。澄みきつた空が、今日位大きくく端しもなく見えたこともありません。風の音もしない、人の聲も聞えません。唯鷲の羽音が、ぱつさくと大空に消えて行くばかりでした。ガンガン王は、自分の顔へてゐることを、鷲が覺らねばいゝかと氣づかひました。

「王様、あなたは顔へてゐらつしやいますね。」  
「なあに、顔へてなんがるものか。」

「でも直ぐ分りますよ、びり／＼響きますもの。海の上だから氣味が悪いのでせう、怖いんですか。」

「なあに、怖くないよ、私は一國の王だもの。さあごらん、手を放して見せるから、ほら、どうだね。」とガンガン王は、怖くてびり／＼顔へてゐる癖に、鷲に弱い王さんだと笑はれまいと思つて、兩の手を放して見せました。

「およしなさいませ、お危うございますから。」と鷲がまだ云ひ終らぬ内に、ガンガン王の身體は鷲の脊中から滑り落ちて、「あつー」と叫ぶ間もなく、真逆様に落ちて行くのでした。

鷲はすぐに其後を追ひました。ガンガン王と鷲とは、丁度深い塊が二つ天から降つて来るやうに、荒れてゐる海の上に落ちて来るのでした。

鷲は、落ちて行く王さまの後を、すぐに追ひました。そして王さまの鐵砲を掴みました。

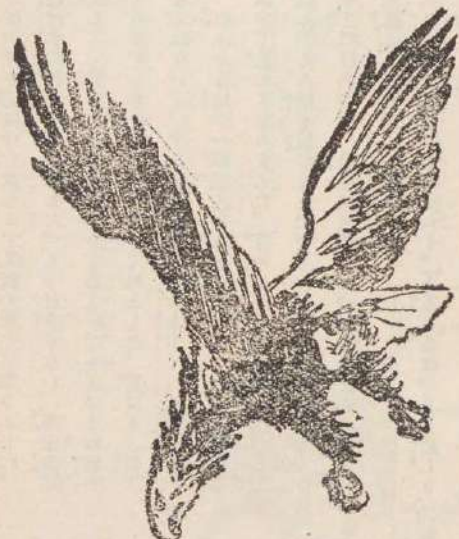
「助けてくれ——」とガン／＼王は初めて叫びました。  
「大丈夫です、大丈夫です、もう助かりました。」と鷲は云ひながら、又空に上つて行くのでした。

「大丈夫かね。」と王さまの聲は顔へてゐました。

「大丈夫です、向ふの木の枝へ行つて休ませよう。」と鷲は云ひながら、森の方に急いで飛んで行くのでした。

やがて鷲は森の中の一軒大きな木の枝にやつて来て、王さまを一先づ其處に下しました。

「下におろしてくれないか。」と王さまは驚に群むやうに云ひました。



「まあ、少し私と一緒にいらつしやいませ、もつと面白い處へ御案内致しませう。」

「いやもう澤山だ、下しておくれ、もしも落ちて死んだら大變だからなあ。」と王さまは下を見おろしました。

「あなたは、そんなに死ぬるのがこわいのですか、私を何度も撃ち殺さうとなすつた王さま。」と鷲は云つて、「ああ私の脊中にお乗りなさいませ、それともお一人で飛びおりなさいませか。」とからかふやうに云ひました。





ガンガン王は仕方なしに、又戦の脊中に乗りました。鷲は木の枝から降りました。「もう仕方がない、運を天に任せて、鷲のするやうになつてゐよう。」と王さまは顔へてゐながらも少しは落ちついて來ました。鷲はもう何とも云はないで、すん／＼飛んで行きます。

向ふから鳩が一羽飛んで來ました。王さまはその鳩を撃つて見たくなりました。脊中の鐵砲をそつとはづして飛んでゐる鳩を狙ひました。ずどん……さすがはガンガン王だけあつて、狙ひはあやまたず、飛んでゐる鳩を撃ち落しました。

「どうだ、うまいものだらう。」と王さまは、もう恐しさを忘れて得意になつてゐるのです。

「まあ、可哀さうに、鳩だつて、あなたと同じに、死にたくはなかつたでせうに。」と鷲は云ひながら、鳩の落ちた場所に下りて行きました。

ガン／＼王は、胸に彈丸を受けて駈れてゐる可哀さうな鳩を見ました。血のにちんだ軟かい羽、其處いらに落ち散つてゐるのを見ました。王さまは、いきなり其鳩を

拾ひ上げました。そしてすぐに鳩の足に結びつけてある紙片を見つけた。この鳩は傳書鳩だと氣づくと同様に、自分のお城に飼つてある傳書鳩ではあるまいかと思ひました。さう思ひつゝも鳩の足の紙片を取つて、急いで開いて見ました。それには、

「王さまが獵にお出ましの後へ、間もなく敵軍が攻めて來て、今、お城を取りかこんでゐます。一刻も早くお歸り下さい」としてありました。王さまは其紙片を持つたまゝ、暫くはほんやりと立つてゐました。

「忠義な鳩を撃ち殺して可哀さうなことをした。困つたことが出來たなあ、鳩が死んだから返事をやることも出來ぬ、あゝ人間も鳥のやうに羽があればい。」とガンガン王が云ひますと、

「さあ早く私へお乗りなさい、怒がお供をいたしますから。」と鷲はせきたてました。

ガン／＼王は、今はもう怖さも何も忘れて了つて、鷲の脊中に乗りました。鷲はガン／＼王を乗せて、すん／＼飛行機のやうに飛んで行きました。間もなく遙かに

お城が見える處までやつて來ました、傳書鳩が知らせて來た通りに、お城のぐるりを敵軍が取りかこんでゐました。

「あゝ、圍んでゐる、圍んでゐる、鐵砲で撃たれぬやうに用心しないとけないよ。」と王さまは鷲に注意しました。

「ほらごらんなさい、見つけて鐵砲を放し出しました。併し、どうして／＼彈丸はとも届きさうにはありません。」と鷲は案外平氣でした。

お城を圍んでゐる敵軍では、鷲の脊中に王さまが乗つてゐるのを見つけたので、一齊射撃にとりかゝりましたが、鷲は高い處を飛んでゐるのでちつとも危くはありませんでした。鷲はガン／＼王を乗せて、怒々としてお城の中に降りました。

お城の中では、急に王さまが歸られたので、みんな勇み立ちました。わーつわつと云ふ聲の聲は次第に高まりました。それに引きかへて、お城を圍んでゐる敵軍は、

ガン／＼王が鷲に乗つて歸つて來たのを見て、びつくりして度膽を抜れました。

「これは只ごとではない、うっかりしてゐると、どんな目に逢ふかも知れぬ。」と云つて、蜘蛛の子を散らすやうに逃げて行つて了りました。

鷲はとう／＼ガン／＼王の家來になりました。時々王さまは鷲の脊中に乗つて威光を示しましたので、長く平和が續きました。



敵國のお城の上を飛んで、威光を示したので、長く平和が續きました。

ガン／＼王はそれつきり獵を止めました。(をばり)



# 王子と燕

齋藤 佐次郎

春のまだ早い頃でした。一羽の燕が、黄、蛾の後を追つて、川のほとりへ来ました。すると、其處で「葦」に遇ひました。燕は思はず立止つて、細りした葦の姿に見とれて居ましたが、すつかり氣に入つてしまつて、

「お前さん、私のお嫁になつておくれな。」と、言ひました。葦は、暫くの間思索してゐるやうに、黙

つてゐましたが、やがて靜かに一つお辭儀をしました。燕は、葦の快い返事を いたので、すつかり喜んで了ひ、翼で水を打つては、銀の漣を立てながら、葦のまはりをぐるぐ廻りました。

それから夏中、燕は葦の氣遣をとりながら仲よく暮しました。

やがて、秋になりました。燕たちは、南の國へ旅立つ時が来たので、皆な支度をはじめました。ところが葦をお嫁

にした燕だけは、平氣で遊び暮してゐました。で、他の燕たちが心配して、

「お前どうして旅の支度をしないの。おかみさんが戀しいのかい。それならお前は本當に馬鹿だよ。お前のおかみさんは、お金だつてないし、それに親類が多過ぎるぢやないか。」

と、いひました。實際、その川は葦で一ぱいになつてゐたのです。しかし、言はれた燕は平氣なもので、皆のいふ事など聞かうともしませんでした。で外の燕たちもあきれ、たうとう皆な南の國へ行つてしまひました。

一人残された燕は、それから急に淋しくなりました。相手の葦は黙つてゐるばかりで、少しも話し相手になつてくれません。それに秋風が川の面を吹くと、一々お辭儀をしてはお世辭をふりまいてゐます。で、燕は、自分のおかみさんが嫌ひになつて来ました。

ある日の事、燕が葦にいひました。

「私はこれまで、一人でこの國に残つてゐたが、何だか淋しくなつて来た。それに寒くはなるし、本當にかうしちや

ゐられない。私はこれから南の國へ行くよ。お前もお出でな。」燕は、たうとうかう言ひ出しました。

しかし、葦は頭を振つて幾度も「いや、いや」をしました。葦には大勢の兄妹や、親類があるので、それと離れて見ず知らずの遠い國へ行くのは、何よりもいやだつたのです。で、燕は仕方なく、

「そんなにいやなら、お前はこゝにおいで。私だけ一人行くよ。また來年の春くるからね、左様なら。」かういつて、燕はとび去つて行きました。

## 二

それから燕は、一日中とんで、夜になつてからある町へ着きました。この町には、高い塔の様な圓柱が聳えてゐるその上に「幸福な王子」といふ大きな像が立つてゐました。この王子の像は身軀中、薄い、美しい金の板で包まれてゐて、二つの眼には、きら／＼と輝く青玉がはめこまれてゐました。それから、握つてゐる劍のつかには、大きな、紅い紅玉が光つてゐました。

王子の像は、町中の人から大層敬はれてゐました。町の中で泣く兒があると、お母さんはきつと、

「お前は どうして「幸福な王子」のやうにしてゐられぬの。」と、言ひました。

また、世の中がいやになつた人が、考へ込みながら此處まで来ると、思はず王子の像を見上げて、

「あゝ、何んて幸福な人だ、天使の様だ。こんな人があつたと思へば、自分だつて仕合せに暮せない事はない。」と思返して、その人は急に元氣になりました。

この町へ来た燕は、何處に宿らうかと思つて、見廻してゐましたが、ふと王子の像が目についたので、

「そうだ、私はあそこへ今夜宿らう。高いから空気がよくて、丁度いい場所だ。」

と、いひ乍ら王子の兩脚の處へ翼を下しました。

「今夜は綺麗な寝床だな。」燕はあたりを見廻し乍ら、獨言をいつて眠りにつかうとしました。すると、何處からか、大粒の雫がポツンと頭の上へ落ちて来ました。燕は驚いて、

「おや、何だらう！お星様はあんなに綺麗に光つてゐるの

に雨が降つたのかしら。」と思つて、見てゐる内に、またほんんと一つ雫が落ちて来ました。

燕は少し怒つて、

「雨を避けない位なら役に立たない像だ。何處かもつとい處を探さう。」

といひながら、飛び去らうとしました。

しかし、燕が翼をひろげない内に、また三度目の雫が落ちて来ました。燕は、われ知らず上を見上げました。——

その時燕は何を見たでせう。

「幸福な王子」の兩眼は、涙で一ばいでした。頬の上まで涙が流れてゐました。月の光に照らされたやさしい王子の姿を見た時、燕は思はず胸がふさがつて了りました。

「あなたは、どなたです。」と、燕が尋ねました。

「私の名は「幸福な王子」といふのだよ。」

と、王子が答へました。

「幸福な王子が何故泣くんです。私までが濡れて了つたぢやありませんか。」

「そりやア私は生きてゐる時には、泣いた事が無かつたか

ら、皆なが「幸福な王子」と言つたのだよ。私は「楽しい御殿」に住んでゐるのだからね。晝間は庭で臣下たちと遊び暮したし、夜は大廣間で舞踏會を開いたりした。それに私のゐる御殿の周圍中は、何處も高い塙だつたから、私は



其處から外へは一度も出た事がなかつた。……そんな風で、私は本當に幸福だつたので、外の事など何にも知らずに、そのまゝ死んで了つたのだよ。すると、街の人達はこんな高い處へ私を建ててくれた。だから、今ではこの町で起る事は何でも見てゐるが、あんまり可哀さうな事が多いので、泣かすにはゐられないのだよ。」

王子が、かういつて話しました。しかし燕は、

「何だい、身體中黄金ぢやないのか。」と思ひ乍ら詰らなさうにしてゐました。すると、王子はまた、

「燕さん！」と、呼びかけました。「向ふの方に見える小さな通りに一軒の貧乏な家があるのだよ。その家の窓が開いてゐるので、一人の女のひとが裁縫をしてゐるのが見えるよ。部屋の隅には小さな子供が熱病で寝てゐる。子供はオレンヂが欲しいといつて泣いてゐるのだけれど可哀さうにお母さんは貧乏してゐるので、河の水しかやる事が出来ないのでゐるのだよ。だから子供は、烈しく泣いてゐる。燕さん、可愛い、燕さん、お前さん御苦勞だけれど、私の劔のつかから紅玉をとり出して、あの女のひとの處へ持つて行

つてくれないか。私の兩足は臺の上にしつかりくつついてゐるので、どうにも動く事が出来ないのだから。」

王子がかういつて頼みましたが、燕は平氣な顔をして、

「私はこれから南のエジプトの國へ行くのです、友達を待つてゐるでせう。皆はきつと、ナイル河のあたりを飛廻つて、大きな蓮の花と話をしてゐる事だせう。私はこんな處にくすぐすしちやゐられないのです。……早く南の國へ行きたいのです。」

「しかし、燕さん、ほんの今夜一と晩だけの事だから、こゝへ宿つて私のお使ひをしてくれないか。子供はあんなに咽喉が渴いて泣いてゐるし、お母さんはあんなに悲しがつてゐるのだから。」

「私は子供なんぞ大嫌ひです。」

燕はきつぱりいひました。



「この夏、私がいつもの河の邊にゐると、粉屋の子供だといふのが二人きつとやつて来て、私に石をぶつたのです。しかし、一つも當りはしませんでしたよ。何しろ、私の敏捷さと来たなら有名なんですからね。燕はかういつたものゝ、王子があんまり悲しうな様子をしてゐるので、思はず自分までが悲しくなつて来ました。で、たうとう、

「こゝは大層お寒いやうですが今夜だけなら、あなたのお傍に居りませう。そして、あなたのお使ひもいたします。」と、いひました。

「有難う、可愛い燕さん。」王子はかういつて、また涙を流しました。

そこで燕は、王子の歸から大きな紅玉を啄き出して、それを嘴にくはへながら、飛んで行きました。燕は、お寺

の上や、宮殿の上や、澤山の帆船の集つてゐる川の上を飛んで、やうやくその貧乏な家の窓のそばまで来ました。

部屋の中では、子供が熱の爲めに苦しんで、床の上をこゝろこゝろけ廻つてゐました。しかし、お母さんはぐつすり寝込んでゐました。それ程お母さんは疲れてゐるのでした。やがて、燕はびよこ、びよこ家の中へ入り込んで、お母さんの指貫の置いてある卓子の上へ、大きな紅玉を置きしました。それから、その髪で子供の額を扇きながら、床のあたりをとび廻りました。

「まあ、涼しいこと。私はもうよくなるに違ひないわ。」子供はかういひながら、いゝ氣持ちで寝入りました。

そこで、燕は王子の處へ戻つて来て、その事をすつかり話しました。

「不思議でございます。氣候がこんなに寒いのに、私は非常に、暖いやうな氣がいたします。」

と、燕がいふと、  
「それは、お前が善い行ひをしたからだよ。」  
と、王子が答へました。

三

夜が明けると、燕は川へ下りて水浴びをしました。

「冬に燕がゐるとは、不思議だなア。」と、橋の上を通る人たちがいひました。燕はその日中、町をとび廻つていろいろの記念物を見歩きまわりました。そして、月が出た頃になつて王子の處へ歸つて来ました。

「私はこれからエジプトへ出立しようと思ひますが、何ぞ御用はありませんか。」と、燕がいひますと、

「燕さん、もう一と晩だけ、私と一しよにゐてくれないか。」と、王子がまた頼みました。

「しかし、エジプトでは友達がみんなして私を待つてゐるのです。その國には大きな湖があつて、葦の間には河馬が寝てゐるのです。日中になると、黄色の獅子が澤山河の水を飲みに出て来ますが、その獅子はみんな緑の玉の様な眼をしてゐるのですよ。……私は早くあの國へ行きたいのです。」

「しかし、燕さん、可愛い燕さん、町の向ふに見える屋根

裏の部屋に若い男がゐるのだよ。その男は大層な學者で、もうぢき立派な本を書き上げるのだけれど、あんまり寒いので、書けなくなつてゐるのだよ。爐の中には火の気がなく、食べる物もないので、ひもぢがつてゐるのだよ。」と、王子が悲しさに話しました。すると燕はエジプトの事などすっかり忘れた體に、

「では、もう一と晩、あなたと御一緒にをりませう。そして、も一つ紅玉をあの男の處へ持つて行きませうか。」といひました。

「けれど、私にはもう紅玉はないよ。私に残つてゐるのは二つの眼ばかりだ。私のこの眼は何千年か前に印度から持つて來た稀しい青玉で出來てゐるのだから、一つの方を啄出して、あの男の處へ持つて行つておくれな。あの男は、それを寶石商へ賣つて、食物と薬を買つて、本を書き上げるだらうから。」

「でも、そんな事は出來ません。王子さま。」

燕はたまらなくなつて、しく／＼泣出しました。しかし、王子は、「燕さん、可愛い燕さん、構はないから私のいつた

月が上つて來たので、燕は王子の處へ戻つて來ました。そして眼をつけやうとしました。すると、王子が、

「燕さん、お前さんもう一と晩私と一しよにゐてくれないか。」と、また頼みました。

「王子さま、今はもう冬です。ぢきに雪が降るでせう。私は我慢にも、もうゐられませんが。しかし、私は決してあなたを忘れないたしません。來年の春には、あなたがおやりになつた紅玉と青玉の代りに、もつと／＼美しい薔薇よりも紅、紅玉と、海よりも青い青玉を持つて參りますよ。」かう燕がいひましたが、王子の耳には少しも入らないやうに、

「この下の四辻の處にマツチ賣りの小さな女の子が立つてゐるのだよ。あの子はマツチを溝の中へ落してしまつたので、マツチはすつかり目になつて了つた。けれども、いくらお金を持つて家へ歸らないと、あの子のお父さんはあの子を打つに違ひない。それで、あんなに泣いてゐるのだ。あの子は靴も靴下も穿いてゐない、その上、帽子さへ冠つてゐない。私のも一つの眼を啄出して、あの子にやつ

七八

通りにおくれ。」と、いひました。そこで燕は、仕方なく王子の眼を啄出して、若い男の屋根の部屋へとんで行きました。屋根には穴が一つ開いてゐて、容易く中へ入れるやうになつてゐました。燕はこの穴からすうつと部屋の中にとび込みました。若い男は、頭を兩腕でかゝへて、うつ伏しになつてゐたので、燕の羽ばたきするのさへ聞えませんでした。

やがて、若い男は頭をあけて見ました。すると、青玉が置いてあるので、

「おや、誰が持つて來てくれたのだらう。神様のお助けた。私は本を書き上げられる……。」

若い男は夢中になつて喜びました。

#### 四

明る日、燕は港の方へ行きました。そこでは、水夫たちが船を出す用意をしてゐました。

「私もエジプトへ行くのですよ。」と、燕は大聲にいひました。しかし誰も氣にとめる者がありませんでした。やがて

ておくれな。そうしたら、お父さんはあの子を打たないだらうから。」と、いひました。

「それでは、もう一と晩、あなたと御一しよに居りませうかね。けれど、あなたのお目を啄出す事は出ません。そんなにしたら、あなたは全くの盲人になつてしまひますから。」

「なに構はないから私のいつた通りにおくれ。」かう王子がいふものですから、燕は、止むなく王子のも一つの眼を啄出して、それを嘴にくはえてとんで行きました。そして、マツチ賣りの少女の傍をどび過ぎながら、少女の掌にそつと青玉を落しました。

それから燕は、王子の處へ戻つて來て、

「あなたは、盲目になつてお了ひになつたから、私はいつでもあなたのお傍にをりますよ。」といひました。

「いや／＼、燕さん、お前さんはエジプトへ行かなければいけない。」と、哀れな王子が答へました。

「いえ、私はいつまでもあなたのお傍にをりますよ。」燕はさういつて、王子の足もとへ、安らかに眠りました。

その翌日も、燕は町の上をとび歩きました。金持らが立派な家の中で楽しさうにしてゐるのに引きかへて、その門の處では乞食がたゞすんでゐました。また、橋の袂では、二人の子供がお互ひに抱き合つて、身体を暖め乍ら「お腹が空いて堪らないア。」と言つてゐました。燕は歸つて来て、その日見て来た事を王子に話しますと、王子が、「私は身躰中美しい黄金で包まれてゐるから、一枚一枚この金の板をはがして、貧乏な人たちにやつておくれ。」といひました。

そこで、燕は黄金を一枚々々はがしました。美しい「幸福な王子」はたうとう灰色の姿になつて了ひました。それから燕は、黄金の板をくはへて、一枚々々町の貧しい人たちに與へました。それから蒼い顔をしてゐた貧乏人の子供たちも、次第にバラ色の顔になつて、往來へ出て笑つたり、遊戯をしたりするやうになりました。

やがて、霜が降つて來ました。霜のあとには、雪が降つて來ました。どこの家の軒先にも氷柱が水晶のやうに垂下

その翌朝の事でした。その町の市長さんが、王子の像の立つてゐる圓柱の下を通りかゝりましたが、ふと上を見上げて、

「おやッ、幸福な王子」がどうしてあんなに汚らしくなつたのだらう。」と、いひました。紅玉は剣から落ちて了つたし、兩眼はなくなつて了つたし、もう少しも金細工らしい處はなくなつて了つた。まるで乞食の樣だ。」

かういつて、市長さんは暫く考へ込んでゐましたが、「いんなに汚くちや、とても此處へ立て置くにいかない。早



りました。哀れな燕は、ますます寒さを身に感じました。けれども、王子を捨てゝ行く氣にはなれませんでした。その内に燕は、たうとう自分の死ぬのが間もない事を知りました。しかし、燕にはまだもう一度王子の肩にとび上るだけの力がありました。

「左様なら、王子さま。どうぞあなたのお手に接吻させて下さいまし。」と、燕が泣き／＼いひました。

「たうとうエジプトへ行く事になつたのかい。それは結構だね。」

「いえ、私の行くのはエジプトではありません。私はこれから「死の國」へ行くのです。王子さま、御氣様よう。」かういつて、燕は王子の唇に接吻しましたが、やがてその足もとへ倒れて死んでしまひました。

その瞬間に、何かしら毀れるやうな不思議な物音が聞えました。それは、王子の鎧で造られた心臓が、眞中から眞二つに割れたのです。たしかに、その晩は、そんなにひどく霜の降つた夜であつたのです。

五

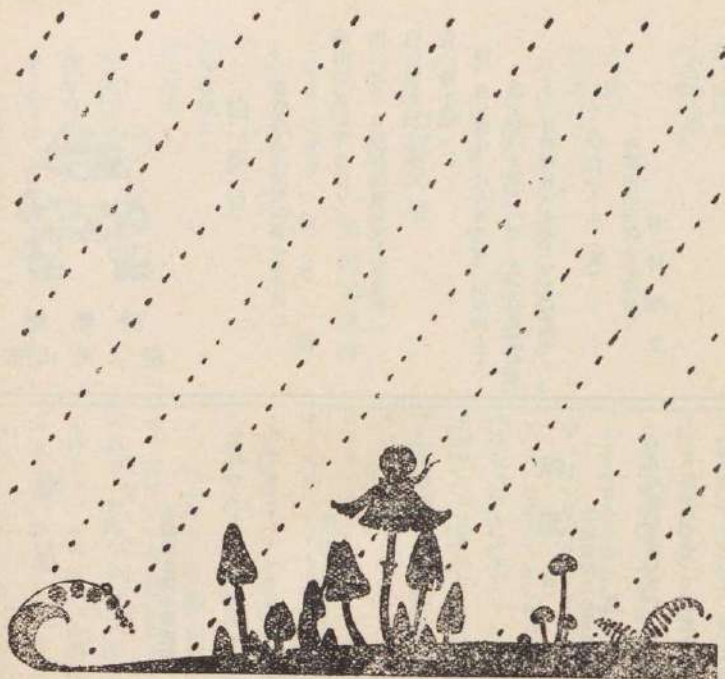
速下すことにしやう。……おや、おや、妙な鳥が死んでゐるな、燕だな。」市長は驚いた様に燕の死骸を眺めました。

その後間もなく、王子の像は高い臺の上から下されて「鎧塵」といふ塵を鎧がす大きな爐の中へ入れられました。塵が不思議な事には、鎧で出來てゐた管の心臓だけが、どうしても鎧けませんでした。それで、仕方なく心臓だけは塵埃箱の中へ捨てられて了ひました。すると、その塵埃箱の中には、丁度、燕の死骸も捨てられて入つてゐました。

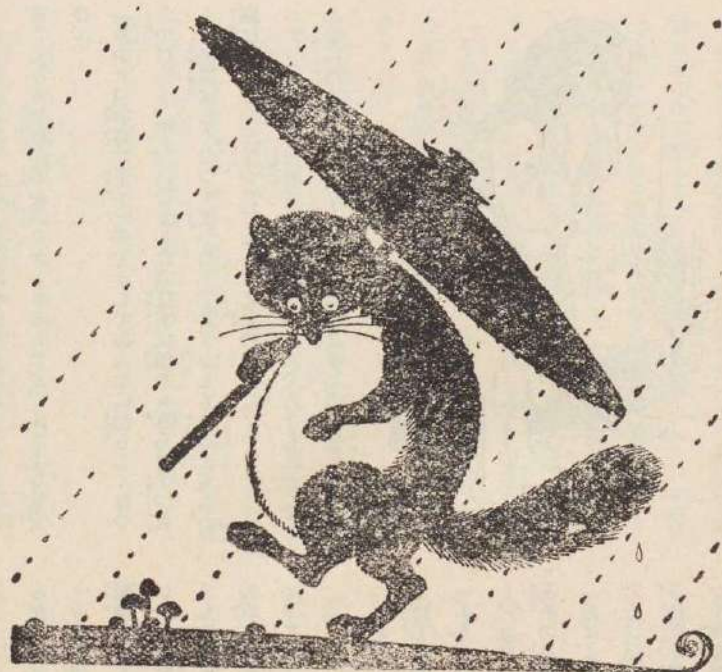
その日、神様が一人の天使に向つて、下界の此の町の方を指しながら、

「あそこにある一番貴いものを持つて來るやうに。」と、おいひつけになりました。すると、天使は神様の前へ王子の心臓と、死んだ燕とを持つて參りました。

「あゝよく選んで來た。この小さい鳥は私の樂園でいつまでも、いつまでも歌を歌はせよう。それからこの幸福な王子は私の楽しい市で仕合せに／＼暮らせよう。」かう神様が言はれました。(をばり)



化け茶釜  
お寺の  
狸は  
化け狸  
雨夜に  
傘  
さして来た



雨夜の傘  
野口雨情  
茶釜は  
文福  
蛇の目傘  
傘  
雨夜の



幼年詩選  
若山牧水選

白い兔(賞)

長野縣上諏訪町高島小學校尋六  
鈴 木 源

御山の雪が半分消えた  
山の神さま喰べらまつた  
白い兔が出現するよ  
青い草を喰べに

評、白い兔は、ほんまらほ、山の神さま、  
雪をたべて草をたべて、まつ白な雲に乗  
り、月の世界へとんでつた(牧水)

くみたて水(賞)

和歌山縣河内小學校尋三  
木 村 唯 夫

くみたて水  
きれいな水

白いゆけが  
ゆらゆらゆら

お日曜が  
いまのほろ

評、何といふ清らかな美しい詩でせう、こ  
れを讀む人の心もその水の清にきれ  
に澄み渡ります(牧水)

つばき(賞)

和歌山縣河内小學校尋三  
加 納 喜 三 郎

つばき つばき  
ま赤なつばき

去年は咲かず  
今年も咲いた

二つ三つ五つ  
ま赤なつばき

評、樺、樺、まつかな樺、まつかな樺をほ  
めませう(牧水)

綴方

アサノコト(賞)

長野縣宮田小學校尋一  
西 田 一 郎

今日ハソトノトヲアケテ見マシタ。  
トモセイノシマシタ。ソシテ、ム  
カフノ山ノハウヲ見タラ、ビカノヒ  
カルモノガアリマシタ。ボクハ、ハジ  
メハキツネタトオモヒマシタ。サウシ  
テ、ヨクカンガヘテ見タラ、ユキノト  
コロヘツエガボチンノトオチデヒカ  
ルノデアリマシタ。

黙想(賞)

北海道野太小學校尋五  
星 川 ヨ シ

みんなが手をひざの上にくんで、ジ  
ット目をつぶつてゐます。  
教室はしんとして、誰も居ないやう

たきものとり

長野縣鹽尻小學校尋二  
境 澄 雄

私はきなふ山へたきものをとりにい  
きました。それでも、とつこやがつれ

です。

耳をすましてゐると、らうかを歩く  
足音がミシノときこえます。

しばらくすると、どこかの教室から  
オルガンの音がきこえてきます。つゞ  
いて生徒の花もみじを歌ふこえがきこ  
えます。きつと六年の教室で歌つてゐ  
るのでせう。

その時、ワツといふさわがしい聲が  
して、「じんどりやるものこーい」とい  
つてるやうです。もう三年は出たのら  
しい。

「よろしい」

と、先生の聲に、目をあげると、まぶ  
しくてボツといたしました。

こをひろつたりして、それでだんく  
いつておみやのうらまでいきました。  
もりの中へはいつていつて、そこらち  
うとんであるきました。ぼらだら  
で、足やなんかばらでひつかかれたり  
して、足のところからがいつばいであ  
りました。それでやつと、ふくろにいつば  
いにしてそれで内へきましたら、おと  
うさんやおかさんがほめました。

夢

岡山市出石小學校尋三  
小 橋 幹 子

私はゆふべこんな夢を見ました。

お父さんと、お母さんと、お姉さん  
と、私と四人で船に乗りました。やが  
て、船はどことも知れぬみに着い  
たので、皆降りました。降りてだ  
いぶんと、氷のはつた海があつて、そ  
の上には道がありました。そこをぶるぶ  
るふるへながら、急いで通りますと、

こんどは山がありました。そこで山へ  
昇らうとしましたけれど、すべつてな  
か／＼昇れません。やう／＼昇つて行  
くと、そこは西洋の國でした。私たち  
は皆西洋の家へあがつて、ごちさうを  
喰べました。西洋人は日本語がわか  
ないのでこまつてゐました。

卵

東京府青刈小學校尋四  
松 田 靜 枝

にはとりを買つてから、今日で三日  
になります。レダホンといつて白い、  
きれいな鳥です。今朝は早く起きまし  
たから、えさをやつて水をとりかへて  
やりました。學校へ行きがけに見まし  
たら、砂をあびてゐました。



埼玉縣熊谷町々學校様二

字野 清

お山のふもとできじがなく  
てつぼうちのおじさんが  
どんと一つばつうつたれば  
きじはばたりとなきやんだ  
きつとおじさんはあのきじを  
ばんのおかつにたべるだろ  
評、いえ〜町へ持つて、おあしにか  
へて、おいしいお菓子を貰つて来る  
(牧水)

木ノウタ

長野縣宮田小學校様一

西田 一郎

木ヨ〜カゼニフカレル木ヨ  
ゴウ〜トオトラタテイル木ヨ  
太イノハナカノ〜オレヨレナイガ  
ホソイノハオシヨレンウダゾ  
オシヨレルトタキモノニタカレルゾ  
評、タキモノニタカレルトアツイゾ〜、

折レルナ〜(牧水)

蜘蛛

兵庫縣瀬川小學校様五

白井 忠二

かせの吹くあま  
天井から足長蜘蛛が  
銀のすじ引いて  
まつさがさまにぶらりんこ  
するする下りて  
つるつる上る

もみの木

東京市豊楽女學校小學校様六

小森澤 祐子

もみの木よお前を見ると思ひ出す  
たのしかつたあのクリスマスを  
口佐作△お池 和歌山 片山利雄△ゆげ  
綿島 原田勝△がん 和歌山 恩賀定四郎  
△狐の嫁入 同 榎坂義雄△金のすゞ 大  
阪 清水貞子△日さま 朝鮮 若松マヌエ  
△ボゾラ 同 長井ハル△白雲 兵庫 北  
井啓二△星 朝鮮 森山新光 △雨の音  
鳥飼 小林茂雄△鬼 山梨 土橋千

學校から歸つて、すぐに鳥ごやへい  
つて見ますと、わらの中に、きれいな  
卵がうんでありました。私はうれし  
て急いで、臺所へ行つて、お母さん  
に「卵をうんだわよ」と大聲でいひまし  
た。「まあどんなの」といつてお母さん  
は出てこられました。私は「とつても  
よい」といつて尋ねますと、「よい」と  
いはれたので、そつと、卵をとらうと  
しますと、おんどりがコツ〜となき  
ながらおこつてきましたので、私はに  
げました。

しもやけ

朝鮮大邱公立第一小學校様五

釜瀬 虎雄

去年のしもやけは唯一つであつたが  
今年、去年出来たあとへ一つと、中  
指と人さし指の間へも一つ出来た。  
去年出来たあとのは、悪い血がたま  
つたのが固くなつてゐる上に、水ぶく  
れのやうなものが出来て、高い所や低  
い所がある。それで友達などから、出  
羽岳陵のやうだといつて笑はれてた。

空堀通で

大田市桃園第二小學校様五

春田 君子

雨が降つて、所々に水たまりが出来  
てゐる。道を歩いてゐる人のだが  
水の中にうつる。

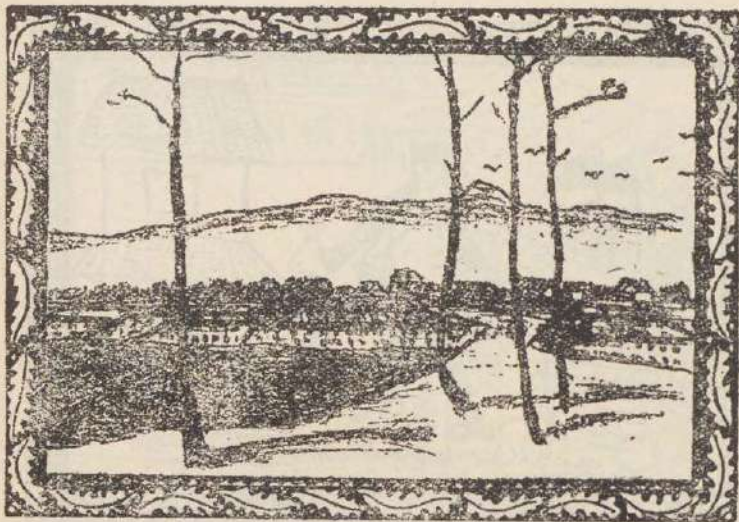
新しく出来た方からは、始終水のや  
うなものがにじみ出るので、ラジユム  
の髷をつけて、白いさらしを捲いてゐ  
るけれど、中々急になほりそうでもな  
い。出羽岳陵の方は捲くことも出来ぬ  
ので、そのまゝにしてほつて置いた。  
所が、いつの事だつたかよくは覚え  
てゐないが、人打ちの時粉君から役け  
られたまりが丁度そこへ當つて、針の  
先でついたやうな小さな穴があいて、  
その穴から水のやうなものがじび〜  
出て、とうとうつづれてしまつた。そ  
して今見るとまるで、やけどのあと  
やうになつてゐる。

うちのしやけ

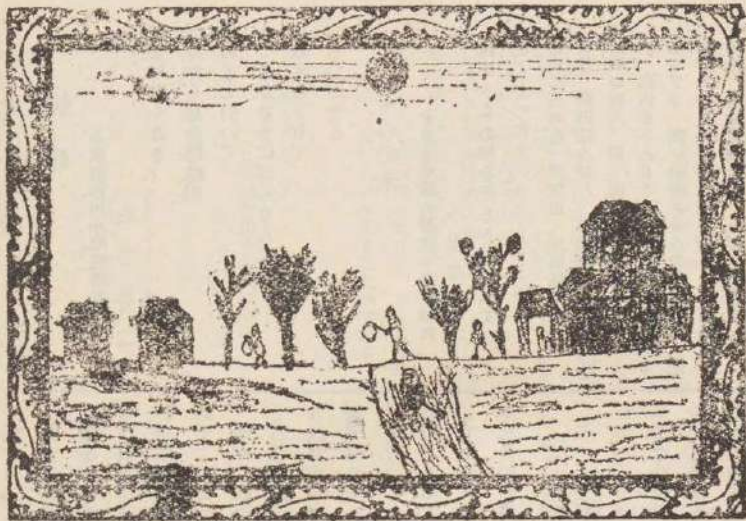
大原天王寺師範附屬小學校様三

佐藤 忠

こないだ、東京のおばあさんの所か  
ら、しやけを二匹送つて来ました。一  
匹はよそへ上げて、一匹は家で喰べて  
みます。家で喰べてゐますのは、だい  
所の柱にぶら下けてあります。  
頭の下左の所が茶色でそれが大方  
人間のむねのはいの様になつてゐて、  
そこだけほねが大きくて、大へんいや  
らしくなつてゐます。その他の所は赤  
くて、ぶりのさしみの様です。からだ  
のまん中に頭から尾まで太いあばらほ  
ねが見えてゐて、少しづつあけてそれ  
がふくれてゐます。その形はにしんに  
よくにゐります。頭の所はまだ食べて  
ないから、うろこがそのまゝついて  
ゐます。そのうろこは水色で所々でび  
か〜と光つてゐます。ひれが六つあ  
ります。又目の所がくほんでしまつて、  
遠くから見ると黒いてんの様に見えま  
す。そして、からだの所々に鹽がふき  
出てるで、白くなつてゐます。そのに  
ほひをかぐと、なまぐさくて、かつを  
のしほからの様なにはびがします。



自畫「かない」愛知縣大成小學校五等 高谷 雅



自畫「ヨルノ景色」山口縣柳井小學校三尋 河本 カタ

お使ひ

兵庫縣日吉川小學校肆四  
土 居 忠

「ごめん。」

と、僕は大きな聲を出して、戸口をはいった。家の中はうすぐらくて、しんさつ室らしいへやのいすが半分程見えてゐる。西の方のガラスが、夕日にきら／＼かがやいてゐる。僕は

「早くきてほしい、日が暮れてしまふ。」  
と思ひながらほんやりとはに立つてゐた。

おくの方から、三四才の子の鼻歌のやうな歌が聞えてきた。

「うむうむうむうむ」

と、おかしいふしでつたはつてくる。僕は思ひ切つて上り口にこしを下した。よと気がつくと、自分のそばに薬びんが三四本おいてある。僕はひやつとした。

「よいその上をこしをかけた事だ。」

と、ごごまをいひながら、よめもしないせに、ふすまの字を見た時、下においであるくつとにらみ合などしてゐた。しばらくしてその家の人が、今朝僕が薬代を包んで

いつたふろしきをもつてこられて、

「おくさんいたゞきましてあやがたうございます。おつりはその中へ入れておきました。」

といはれた。あんまりむづかしい事をいはれるので、こたへかねて、たゞ

「へえ／＼。」

といつておいた。それからその包をもらつて、

「さようなら。」

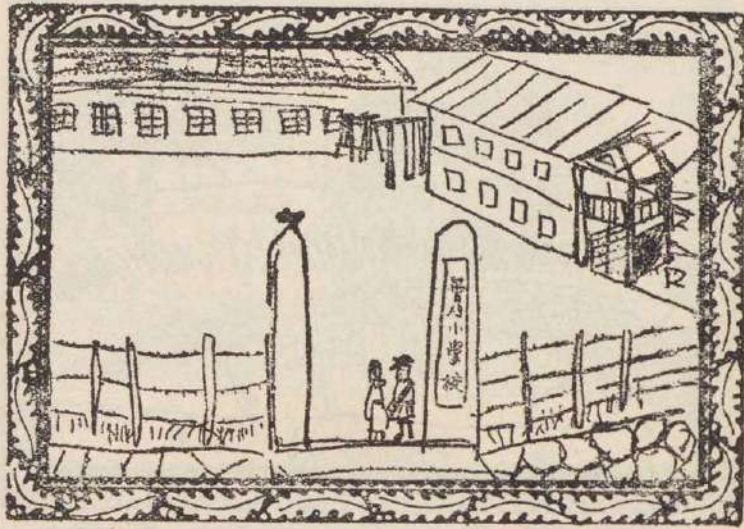
と戸口を出てあしだをからつころ、からつころとならさせながら歸つた。

押繪の箱

京都府中舞臺女子小學校高二  
村 上 貞 子

北風の吹く寒い日曜日。朝からお母さんに「本箱の中が大變へん亂雑だ。」といはれて、しぶ／＼ながら片づけしてゐた。するとその引出しの隅から、古びた押繪の箱がへべちやくなつて出てきた。

それは私が京都に居た頃で、七ツ●時であつた。替垣一つへだてた隣に、玉江さんといふお友達があつた。私とは大へん仲よしで、いつも二階の機でまよ／＼をした



（才二十）松野村 東京府荏原郡黒目村 白由「私の学校」 白由

で、遊びかけた時、お父さんがわるいといふ電報がきて、私は母と、中舞鶴へ歸ることになった。その時玉ちゃん、私にこの箱を下さつた。

牛

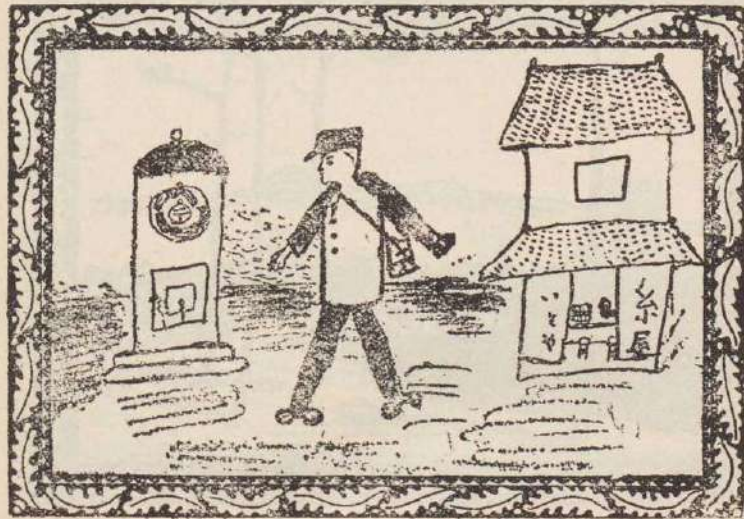
兵庫細川縣第一小學校 小 山 安 雄

僕の家には、牝牛が二頭居る。いつも僕を見ると、早くまぐさをくれ〜といふ様に、頭をクゴかしてゐる。僕は切りたくなくつても、ひとりでに桶をとつて切つてやる。ゴシ〜切ると、牛はうれしそうに、うまやをまはつてゐる。そのうちに、桶に一ぱいになつた。

奥の方から、「兄ちゃん」といつて、妹がカラ〜と下駄の音をたてて出て来た。「こいも〜がくうのん」「いんやお前がくうのんや」「こんなんくらモーヤ」といつて笑つた。

僕はまた、まぐさをもんでやつた。牛はうまさうに、音を立てて喰つた。

うまやを出ると、牛はモーとないた。となりの牛も、モーとないた。



止 山森 二等校學小町優市野長「やんびうゆ」 白由

り、奥さんごとをして遊んでゐた。王江さんは目のばつちりとした、色の白い子で、小さい口もとに、いつもえみをたよえてゐた。

ある日のこと、やはりお二階で、おもちゃ箱をひつくりかへして、車屋さんごとをしてゐた。疊の上といはず椽側といはず、すらく〜ひきすりまわるので、とう〜下で雑物をしてゐられるお母さんに知れて、しかられた。それでも二人は、くす〜笑つて、知れない様に、おふとんを押入から出して、其の上で引きつづてゐた。すると、とじ糸にひつかよつて、玉ちゃんがあほ向けにころび、其の上に私がぶつかつた。玉ちゃんは私の體の爲に顔がふとんにひつついて、息が出来ないものだから、「ウウウ……」と言つてもがくので私も真ねして、「ウウウ」と言つてゐた。しばらくすると、玉ちゃんの聲が出なくなつたので、ひよいと顔をのぞくと、玉ちゃんは目を白くして、口びるをかへてゐるので、びつくりして、「お母さん早く〜。」と、あるだけの聲を出してさけんだ。上つてきたお母さんも、びつくりして、直ぐお隣の小母さんをよぶやら、お醫者をよぶやら、大さわぎであつた。五六日して玉ちゃんも直り、又もとの通り二人が二階

自由畫の版に就て

山本 鼎

九二



自由畫「三ヶ所」(賞) 東京下野多摩郡並村 長野大英(七才)

▲樂る画の数が月々にふえてゆきます。それからお手本へ、雑誌の  
 描なんが真似した畫が月毎に減つてゆきます。これはたいへんうれ  
 しい事です。

△北海道の佐々木雄三君は軍艦の畫を高眞から模寫しました。た  
 いへん正しくめんみつに、そして上手に模寫してあります。あゝいふ  
 模寫もしたつてかまひはしません。それよりも景色なり、人物な  
 り、動物なり、果物なり、お断なりを見たまふ思ふまゝに描いて見  
 給へ、模寫ばかりして居るといぢけた畫きりかけないやうになりま  
 すからねえ。

△今度も水彩畫がすばかりありました。用本習作君のなぞはすいぶ  
 ん長く出来て居ましたが、雑誌へ出すわけにゆかないのは残念です。

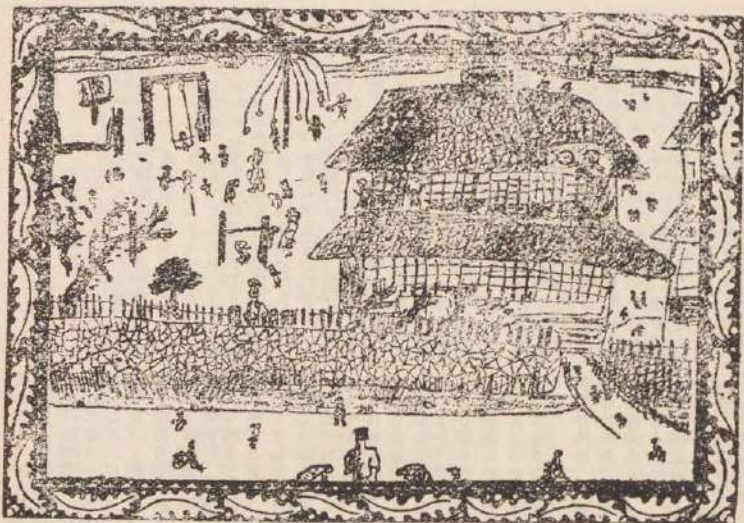
△なぜ雑誌へ出せないかといふと、あの畫を版にして印刷するとご  
 ちや／＼になつてしまふのです。なぜごちや／＼になるかといふ事  
 を少しお話ししましょう。

△あなた達の畫を雑誌へ其まゝのやうに印刷して出すには、高眞  
 の版にしなければなりません。

△其版の種類にざつと三つあります。

△三色版。銅目版。鉛筆版。の三つであります。

△三色版といふのは、色彩のある畫に用ひるもので、畫のまかの色  
 を、赤、黄、青、の三つに分解して高眞にしそれを三箇の銅目銅版に  
 作つて、今度赤、黄、青のインキで取替て印刷するのです。さうする  
 と分解した色の濃淡が一とつになつて原畫のやうになるんです處が



自由畫「學校」(賞) 愛知縣知多郡武豊小學校二 中川

此三色版といふのは畫のある上等な紙に刷らなければならぬので  
 す。御覧なさい、いつも口輪にあるきれいな色の輪が三色版なんです。

△銅目版といふのは、どんな畫でも畫の濃淡になつて一とつの版に  
 作られますから、したがつて、藍、赤、黄、緑等の色は濃くうつり  
 青色はすべて淡くうつるのです。そして何も描いてない眞白な處で  
 も、一面に細かいボツ／＼の點で作られますから、鉛筆の淡い線な  
 どは其れがみ色のなかにいよ／＼淡くやつてしまふのです。そして  
 此銅目版もやはり上等な紙に刷らないと眞黒になつてしまひます。

△銅目版といふのは、鉛筆版の事です。此版ははつきりと線を描い  
 た畫にだけむくのです。水彩畫や色鉛筆畫や、油畫はむろんの事。  
 たゞの鉛筆畫で指てこすつてあつたり、一寸色をつけてあつたり、又  
 はかに線が淡ぼんやりして居ると、此版にはあはないのです。處で  
 此銅目版はどんな紙でもはつきりと刷れますから、新聞や雑誌へ  
 出す畫には一番多く用ひられるのです。

△鉛筆の畫も此銅目版になるのですから、いかに立派に描けて居  
 ても、油輪や、水彩畫や、色鉛筆畫や、こすつてある鉛筆畫は雑誌  
 へ出す事が出来ないのです。この版のお話をよくのみこんでおいて  
 下さい。

△諸君は、色鉛筆でも、水彩の具でも油輪の具でこすつた鉛筆でも  
 どうぞ澤山におかきなさい。併し雑誌へ送つて下さる畫は、濃くか  
 ける鉛筆ではつきり描いたものか毛筆で描いたものに限るのだと思  
 つて下さい。

▲けれども、『金の船』が今に三色版を使ふやうになるとそれこそど  
 んな畫でも送つて下さつてよろしいです。其時は前にお知らせしま  
 す。(三月廿日)

# 綴方を讀んで

綴方は一般によくありません。みんなすなはち正直に書いてあります。いやな飾りや、ひりな言葉や體本に出でた言葉で自分分がほんとうに、さう感じてしぜんに出て来た言葉でないものがだん／＼少くありません。しかし先月でもさうでしたが、とくに優れたといふのがあります。もつと／＼勉強して下さい。今月當にしました、西田君の「アチノコト」は子供らしい飾り氣のない純な氣持が出てゐます。子供のするどい感覺にうつたそのまゝです。尾川さんの「黙想」も變つた題材で、みんなが手をとって黙想しやうとしてゐながら、いろんな音や、響がきこえてきて、一寸もおちつけないところがかなりよく出てゐましたので面白く思ひました。境君の「たきものとり」もやつぱり子供らしい氣持がよく出てゐます。總じて、尋常一年や二年の子供の書くものには、するどい、いつはらだん／＼と上級になると、上手にはなりますが、どうも生々とした感じを失ひます。巧く作らう、上手に書かうと思ふより、踏まひらからつてゐる子供らしい、感じ方、見方で、そのまゝすなはち書く方がいゝのです。子供の感じは、とても大人のまじめの出来ないほど立派な筆もです。釜淵君の「しもやけ」もよく出来てゐます。あれは「出羽丘陵」といふ題で書いたが、「しもやけ」に直してを書きました。また、しもやけがつぶれたといふのを、平野に

なつてしまつたとありましたが、やつぱりつづけてしまつたといつた方がいゝかあります。佐藤君の「うちのしやけ」はだいい所に、こまかに見て、そのまゝ正直に書いたとまり子供らしい感じは出てゐませんが、巧いのです。あゝいふ短い時間に出つたことを書くのは、「一寸むづかしい」ものです。一日中、朝から晩までの間に起つたことを、ながたらく書きよりか、短い間のことを書く方が、つきりして、ひきしまつて來ます。もつとかがらにもあります。長い間のことをばなればならないものは、さうしなればなれば、「雪」とか「春」とか「月」とかはじめから題をこしらへて作るのはどうしてもいゝかあります。「雪」といふことについて書くより、雪の降つてゐる有様とか、雪のつもつてゐる野や路のことを見たまゝに書く方がいゝかやうです。どん／＼お書きなさい。善くも悪くも書いてるうちに上手になれます。(記者)

同山 山道富士子△まどと 詞水鹿野子△お人形 同 岡田加代子△きのふした 同 龜岡 山口 龜岡大助△ホルガツせん 同 龜岡 飯△おどかし 山口 森一美△よいどの人 愛知 神谷助△家のしゆらぜん 同 光岡 星一△すご六 福井 南澤太郎△根元 京都 桑垣すす△あまめまき 福島 長谷川 初枝△弟と友達 同 澤野カツ△二年生 兵庫 北井啓二△大みそかの晩 朝鮮 淺井 子△チウインガム 同 山本克己△五時間日 山口 林茅里△夜店 大阪 石上エ子△夜 店 同 辻あい子△お舞子の日 京都 瀧野 マスエ△英詩 福岡 山本孝二△雪 西郷初 江△日本ばれ 兵庫 中政政乃△静夫さんへ 山梨 大橋千△郵便局 福島 小倉賢一△幼 心 安藤ふじの△飛行機 福井 山田誠一 △私の弟 米澤 三かの子

# 定價改正廣告

本誌を發行して、五月、六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月、と、半年にしかならないのに、度々時代の値上げをしなければならぬのを遺憾に思ひます。こんどまた／＼紙代や、印刷代や、製本代が暴騰しましたので、東京で發行せられる雑誌は値上げすることにになりました。併し値上げをします以上は、よりよい雑誌を作つてお目に掛けなくてはなりません、經濟の許す限り我々の努力の續く限り「金の船」を立派なものに仕上げる爲に全力を注ぎませう。

それから、読友の方々に對しても、五月、六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月、と、半年にしかならないのに、度々時代の値上げをしなければならぬのを遺憾に思ひます。こんどまた／＼紙代や、印刷代や、製本代が暴騰しましたので、東京で發行せられる雑誌は値上げすることにになりました。併し値上げをします以上は、よりよい雑誌を作つてお目に掛けなくてはなりません、經濟の許す限り我々の努力の續く限り「金の船」を立派なものに仕上げる爲に全力を注ぎませう。

# 再び「童話寶玉集」に就て

富山房の「童話寶玉集」は、日本の童話書籍中で異彩を放つてゐます。アラビヤナイトから始つて既に六冊を出してゐますが、是等のもの、中には將來尙一層の工夫を加へたいと思ふものも見えます。併し、今度の楠山正雄氏編の「童話寶玉集」に至つては、編者の苦心が察せられる得難い童話集です。各國から一篇づゝ其國の傑作を選出して來て、而もそれを一月二月と月の順に並べ、巻頭にアンデルセンが四季の移り變りを童話化した「お伽ごよみ」を付けたのは非常に氣のきいた試みてした。而もその間に挿んだ、太陽と草木の三色版刷の挿畫に至つては更に氣持がよいものです。挿畫と挿畫は全部岡本錦一氏の手になつたのですから、その價値は改めて述べる迄もありません。童話の挿畫は如何に畫が巧みても質相な線をもつて描いたものでは到底童話文學の挿畫として推薦する事は出来ません。常に豐富な感じのするものでなければならぬい善です。岡本氏は實にふつ／＼とした線を持つた人であつて、而も氏の質實な畫風は實に此の方面に於ける得難き畫家だと思ひます(富山房發行、定價金三圓四錢)

# 金の船誌友

- 朝鮮 佐藤英信君○大阪 室山順二君○神奈川 佐藤かつ熊君○岡山 日北野澤子君○朝鮮 有馬辰二君○千葉 橋井勝典君○廣島 清水壯介君○東京 若山辰人君○東京 長野英夫君○北海道 松下康三君○滋賀 尾崎弘三君○大阪 伊藤源太郎君○山梨 村尾滋君○東京 村野浩太郎君○福岡 中野毅君○宮崎 松永謙君○高知 山崎謙太郎君○三重 大井伸之助君○愛媛 安川利雄君○京都 久野正一君○秋田 櫻井隆平君○新潟 山下勉君○宮城 中川英之介君○長野 板倉健之助君○北海道 松野専太郎君○盛島 千石正造君○奈良 友田一郎君○東京 大島良二君○石川 牧野獅子雄君○長崎 佐々木智藏君○和歌山 大谷一雄君○長野 村井英五郎君○千葉 前野勝己君○栃木 大山忠三君○静岡 芳野仁三郎君○静岡 清水市藏君○京都 野阪隆太郎君○滋賀 小野正己君○青森 太田郎君○福島 加藤君子君○茨城 野田よし子君○長野 島田敦子君○滋賀 宮澤興一郎君○千葉 岡村常子君○神奈川 瀧田三郎君○東京 野原家重君○島根 井手正夫君(以下次號)

子供の自由畫を募る

山本 鼎

子供諸君、こんど、この雑誌で君たちの畫をいかに書いて、僕が、みんなの畫のうちから、選んだのを、毎月六つづつづらる此處に、寫眞の版にして出すことになりました。

自由畫、といふのは、お手本や、雑誌の畫なんかを見て、描いたものでない畫のことです。君たちが、かつてに描いた畫のことです。ですから、君たちはお手本や、雑誌の畫なんかをみて描かずに花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顔なり、なんでも、君たちの好きなものを、かつてに描いてごらん下さい。

お手本を見て描いたり、雑誌の畫なんかをみて描いたものは、みんな落第ですよ。それから、あんまり、うすく、ぼんやりかいてある畫は、たいそういゝ畫でも寫眞の版になりませぬから、及第しても雑誌へは出されません。そのかはり、そんないゝ畫は僕が戴いてあげたいにしまつておきます。

大人諸君、——以上の金を御賛成下さい。子供達は、本来、お手本を真似するよりも、自由に、見る所のもの、もしくは見たことのあるものを、描き度がるものです。さういふ子供には、出来るだけ、良質の畫用品を與へて下さい。そして、子供を受すると同じ愛を以て、彼れの創作を迎へて下さい。大人に、智、感、情がある如く、子供にも智、感、情があります。大人に美術がある如く子供にも美術がある筈です。子供の美術は彼れの眼と手によつて自然かち直接に捉へられた、いのものです。

◎童話童論募集

吾々はかくれたる童話、童論作家を紹介したいが爲めに、毎月童話童論を募集いたします。題材は勿論作家の自由ですが、内容形式は共に従來の型を破つた、眞に藝術的な作品を求めます。

原稿の枚数は、童話の場合には十行、童論の場合には八行以内、童論の場合には廿五行以内。優秀な作品は誌上に掲載し、且相當稿料を差上げます。選者は、童論は野口雨情先生、童話は當分の内編輯部でいたします。

◎金の船の誌友募集

「金の船」の誌友を募集いたします。誌友になれば、いろいろの便宜や特典がございます。誌友規則を知りたい方は編輯所宛にお申込み下さい。すぐお知らせいたします。

東京府下田端三百五十一番地  
「金の船」編輯所

少年少女の創作募集

(原稿は東京府下田端三五十一番地「金の船」編輯所へ送つて下さい)

自由畫 山本 鼎 先生選

自由畫のことは、山本鼎先生が、前頁に書いて下さつたから、ごらん下さい。

綴方 編輯部選

綴方は、みなさんが、見たこと、思つたことを、そのままだん遣つてゐる言葉で書いて下さい。

若山 牧水 先生選

幼年詩は山なり森なり花なり何でも見たり、感じたりしたことを、みなさんの好きなやうに、詩にして下さい。

自由畫はなるべく、半紙位の畫用紙に書いて下さい。

綴方、幼年詩は用紙も字數も、みなさんの自由です。しかし、解りやすい様に墨かインクで書いて下さい。

住所、姓名、年齢などは落さないやうに、學校へ行つてゐる方は學校名と學級を、ちやんと書いて下さい。

人のものを真似たり雑誌や讀本や綴方の手本など見て書いたのはいけません。

よく出来たのは、雑誌にのせます、中でも優れたのには賞品をさしあげます。

(意注の金送)

大正九年四月五日印刷納本(毎月一回)  
大正九年五月一日發行(一日發行)

編輯人 齋藤 佐次郎  
發行所 東京市麹町區飯田町三十五番地  
印刷所 高橋 徳部  
東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地  
發行所 キンノツソ社

K2A-16

大正九年十月十六日 大正九年四月五日印 第三種郵便物認可 大正九年五月一日發行(毎月一日発行)

東京 キンノツノ社 發行

童話文學に偉大な暗示を與ふる少女の創作(愈々發賣)



西村アヤ子著  
定價  
金壹圓五十錢

紀州の新宮の町に、洋畫家を父として生れたアヤ子さんは、未だほんの十二歳で、小学校の尋常五年生ですが、實に驚くべき天才です。「ピンチヨ」はこの幼い著者が、あやつり人形の一生を書いた、それはく面白く長篇童話で、挿畫から本の裝訂まで、凡て一人で作り上げたものです。しかも、その童話は今の一流の大家でさへ、到底これ程生きくとは書けまいと思はれる程巧みなもので、その「自由畫」ともいふべき挿畫は、日本鼎さんを感心させた程立派なものでした。

「ピンチヨ」を読んだら、世間の人はどんなにか驚く事てせう。童話の大好きな皆さんは勿論の事、お母さんも、お父さんも、學校の先生も、文士も、美術家も、是非一度は読んで見なければならぬ本です。

(定價三十錢)

東京 東營振 町 麹 京 東  
二七五〇三 社 ノ ツ ノ ン キ 町 田 飯 區